

# 桂園派の形成・展開と真宗仏光寺派交流圏

課題番号 16520106

平成16年度～平成19年度科学研究費補助金  
(基盤研究 (C)) 研究成果報告書

平成 20 年 5 月

研究代表者 田中 仁  
鳥取大学地域学部教授

目次

はしがき

一

研究組織・研究経費

二

研究成果

一

第一章 仏光寺『御日記』の香川景樹

三

仏光寺『御日記』の香川景樹

五

―文化六年まで―

仏光寺『御日記』の香川景樹

二一

―文化七年から九年まで、文化十二年から十四年まで―

仏光寺『御日記』の香川景樹

三七

―文政元年から五年まで―

仏光寺『御日記』の香川景樹

五五

―文政六年から八年まで、文政十年から天保十三年まで―

仏光寺『御日記』の香川景樹

七八

―天保十四年から嘉永四年まで―

第二章 桂園派の形成・展開と真宗仏光寺派交流圏

九九

柳下清老と真宗仏光寺派

一〇一

柏原正寿尼と常楽寺恵岳

一二四

―桂園派形成の一事例―

〔付録〕

鳥取県立  
博物館所蔵

香川景樹の手紙一通

― 『花の跡』の成立時期について―

一五三

一五五

## はしがき

この冊子は、研究課題「桂園派の形成・展開と真宗仏光寺派交流圏」にたいして、平成十六年から十九年までの四年間に与えられた科学研究費補助金による調査研究の概要（研究組織、研究経費、研究発表）と、研究成果として随時公表した報告をまとめたものである。ただし、第一章の最初においた「仏光寺『御日記』の香川景樹―文化六年まで―」と、付録として末尾に付した「鳥取県立博物館所蔵香川景樹の手紙一通―『花の跡』の成立時期について―」は、補助金交付以前の調査にもとづくものである。

前者の「仏光寺『御日記』の香川景樹―文化六年まで―」は、その冒頭に記したように、景樹の「歌日記」の「年月日付け」の検証と景樹伝の新事実発掘を目的として、仏光寺『御日記』に見える景樹にかかわる記事を抄出し、「歌日記」と比較対照してみたものである。この調査の過程で、「桂園派の形成と展開」の少なからぬ部分は、「真宗仏光寺派寺院の僧侶や門徒、そしてその関係者が景樹の和歌や歌論を受け入れていったこと」と言い換えられるのではないかと思うにいたった。その点で本研究の出発点にも基礎にもなった報告である。

後者の「鳥取県立博物館所蔵香川景樹の手紙一通―『花の跡』の成立時期について―」は、十年以前に公表したものである。『御日記』とはじめとする仏光寺所蔵資料に接するより前のことで、そのため本編の諸報告との間には種々の不統一があるが、本山仏光寺の第二十三代門主随応上人が景樹ほかの人々をともなつて催した嵐山遊覧の年次にかかわる考察をふくむのでここに収録した。

なお、収録した報告は全編にわたって誤字脱字をふくむ表現上の誤りやわかりにくい箇所を改め、調査の粗漏を補い、考察の誤りを正した。また、写真を数点付け足した。

田中 仁

## 研究組織

研究代表者：田中 仁（鳥取大学地域学部教授）

## 交付決定額（配分額）

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成16年度	1,600,000	0	1,600,000
平成17年度	700,000	0	700,000
平成18年度	700,000	0	700,000
平成19年度	700,000	210,000	910,000
	3,700,000	210,000	3,910,000

## 研究発表

### （1）雑誌論文

田中 仁「仏光寺『御日記』の香川景樹

—文化七年から九年まで、文化十二年から十四年まで—

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要） 査読なし 第1巻第1号

平成16年 121-135

田中 仁「仏光寺『御日記』の香川景樹 —文政元年から五年まで—

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要） 査読なし 第2巻第1号

平成17年 119-133

田中 仁「柳下清老と真宗仏光寺派」

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要） 査読なし 第3巻第3号

平成19年 363-384

田中 仁「仏光寺『御日記』の香川景樹

—文政六年から八年まで、文政十年から天保十三年まで—

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要） 査読なし 第4巻第1号

平成19年 139-160

田中 仁「柏原正寿尼と常楽寺恵岳 —桂園派形成の一事例—

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要） 査読なし 第4巻第2号

平成19年 228-253

田中 仁「仏光寺『御日記』の香川景樹 —天保十四年から嘉永四年まで—

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要） 査読なし 第4巻第3号

平成20年 155-174

### （2）学会発表

なし

### （3）図書

なし

研  
究  
成  
果

第一章 仏光寺『御日記』の香川景樹

# 仏光寺『御日記』の香川景樹

——文化六年まで——

田中 仁

## 一 はじめに

小稿の目的は次の二つである。

〔1〕 仏光寺所蔵の仏光寺『御日記』の香川景樹関係記事と香川景樹「歌日記」<sup>(1)</sup>のそれと対応する記事を比較し、その結果を報告する。

〔2〕 仏光寺『御日記』によって判明した、仏光寺にかかわる景樹の伝記的事実を紹介する。

〔1〕で主として注意したいのは、「歌日記」の日付の検証である。

香川景樹研究にとって「歌日記」はいうまでもなく必須の基本資料である。しかし、その日付は時に疑わしく、慎重に確認したうえでなければ、特に伝記研究には使いにくい場合がある。この問題については、以前、「歌日記」の「年づけ」を『桂園聚葉』によって検証した際にふれた<sup>(2)</sup>。「年づけ」に疑問があることは分かっているも、寛政十二年(一八〇〇)から天保十四年(一八四三)にわたる膨大な日記であって、その正誤の確認は容易ではなく、景樹やその門人、知友等の調査・研究にかかわるものが、それぞれ可能な範囲内で検証し、その結果を総合するほかはない。その「可能な範囲内」での試みの一つとして『桂園聚葉』との対照を行ったのであるが、今回は仏光寺『御日記』のうち文化六年までとの対照を試みる。

〔2〕は、『御日記』の文化六年までに見える、景樹関係記事の

紹介である。これによって、少なくとも小稿でとりあげた文化六年までについては、景樹の伝記を書き換えなければならぬほどの事実は見いだせなかったが、「歌日記」もふくめて従来知られている資料には出ていない多少の事実がふくまれている。

文化六年までとするのは、現在までに見るを得たのがそこまでという事情もあるが、一つには、『花の跡』の嵐山遊覧が文化六年四月十日のことと推測される<sup>(3)</sup>からである。結局『御日記』のこの日に、嵐山遊覧の記事はなかったが、このことについては別の機会に述べる。

## 二 仏光寺『御日記』について

本題に入る前に、まず仏光寺『御日記』について、次に仏光寺と景樹との関係について略述しておく。

仏光寺は、京都市下京区にある真宗仏光寺派の本山で、『御日記』はその仏光寺の日誌である。天明八年(一七八八)正月晦日の天明大火当日の記述から始まり、澁谷有教「佛光寺御日記」出版にあたって<sup>(4)</sup>によれば昭和初期まで百数十年分が残っているという。

この日記を誰が書き、誰が編集して現在見られる形態になったのか、現時点では未詳と言わざるを得ない。三月二十五日の記事で終わっている享和二年分に、本文のほとんど全部をしめる筆跡とは異なる筆跡で、「写真1」のように、



相模介殿、御日記此所迄御付置被成候而、此末不相知候事。

という識語があり、正月一日、二日だけの文化二年、正月十四日までで終わっている同四年にも、それぞれの年の末尾に右と同筆ではほとんど同文の識語が見られる。これらの識語によって、「相模介」なる人物、おそらく二条家侍で仏光寺に付属されていた小幡徳清が、この頃の『御日記』に深く関与していることはわかる。

しかし、その徳清の記した「御日記」が現在見られる『御日記』とどのような関係にあるのか明らかではない。享和二年の『御日記』の巻頭には重要事項を抄出した、その冒頭を〔写真2〕として掲出するような目録が付けられているが、その筆者は筆跡の特徴が共通していることから識語の筆者と同一人物と思われる。これに対して日記本文は前記のとおりほとんど全部、〔写真3〕のようにそれとは明らかに別の筆跡である。したがって、一見したところでは日記本文の筆者が相模介であり、それとは別の人物がそれを読んで目録を作って識語も記した、と考えられる。しかし、日記本文の中に一部分ではあるが識語・目録と同じ筆跡が見られるし、日記本文には含まれていない情報がそれと対応する目録の条文の方には見える場合もあつて、ことは単純ではない。

『御日記』と類似の記録である『妙法院日次記』について、「多数の筆者が参加しているが、ある程度、時期を区切って坊官により整理し直されており、直接に記録した本人の自筆は少ないものと思われる」<sup>(5)</sup>と言われている。直接に記録されたものではなく、元になる記録があつてそれを整理し清書したものである、という点では、『御日記』もこれと同じであつたかもしれない。日記本文は小幡徳義が記録を整理編集して記したものであり、その後に、仏光寺に仕える誰かが目録を作つて識語を付けた、その際、元になつた記録も参照し、徳清は採録しなかつた情報を付加することもあつた。

想像をめぐらせるなら『御日記』享和二年・文化二年・同四年はこのようなにして成立したものであろうが、確かなことはわからない。ただ、成立の過程はどうであれ、その資料としての価値の大きさは疑うべくもない。それについては、たとえば次のように言われている。

渋谷文庫と称される土蔵中に、多くの古文書・古記録が裏蔵されている。それらはおもに天明八年（一七八八）正月の京都大火以降に筆記されたものであるが、中には罹災を免れた近世前期の文書も含まれている。いずれにしても近世の佛光寺を具体的に知る貴重な史料群である。その中でもっとも注目されるのは「御日記」であろう。一般に江戸時代の諸本山では、克明な日々の記録が綴り続けられたが、佛光寺においても大火直後の分から百数十年におよぶ膨大な冊子が遺されている。そこには御堂や寺内のことはもとより、門主の日常生活や交際に至るまでのが記され、まさしく質量ともに佛光寺史の基本史料といえるのである。  
（『佛光寺の歴史と信仰』<sup>(6)</sup>）

現在、右の解説にある天明大火の年の天明八年から寛政十二年（一八〇〇）までの十一冊が、『佛光寺御日記』として次のように翻刻されている。第七巻までが渋谷有教第二十九世門主、第八巻以降が渋谷曉眞現門主の編で、いずれも本山佛光寺刊である。

第一巻	天明八年	昭和六一年一月
第二巻	天明九年（寛政元年）	昭和六二年一月
第三巻	寛政二年	昭和六三年一月
第四巻	寛政五年	平成元年一月
第五巻	寛政六年	平成二年八月
第六巻	寛政七年	平成三年三月

第七卷	寛政十年	平成四年三月
第八卷	寛政十一年	平成十一年三月
第九卷	寛政十二年	平成十二年八月
第十卷(補遺Ⅰ)	寛政八年	平成十三年一〇月
第十一卷(補遺Ⅱ)	寛政九年	平成十四年八月

現在引き続き刊行の準備が進められており、その作業にかかわって『御日記』にふれる機会も与えられ少しずつ繙読しているところであるが、読みすすむにつれて仏光寺と景樹との密接な関係がうかびあがってくる。

### 三 仏光寺と香川景樹 その一

景樹が真宗仏光寺派二十三世門主随応上人の愛顧を受けて仏光寺に出入りしていたことは従来から知られていた<sup>(7)</sup>。景樹自身、「歌日記」文化三年(一八〇六)正月九日に、次のように記している<sup>(8)</sup>。「仏光寺のおほん君」(二行目)、「みこのかみ(御兄)」(七行目)、「みはらから」(二三行目)は随応上人、「正行院殿」(二行目)は随応上人の弟の専應連枝である。真宗において「連枝」は門主の兄弟をいう。「有栖川中務卿の宮」(一二行目)は有栖川宮織仁親王、「なね」(同)は「あね」の誤りで、知足院宮であろう。『織仁親王行実』<sup>(9)</sup>によれば、名は経子(ふみこ)。兼宮、改知宮。織仁親王の兄の音仁親王の一女であるが、祖父の職仁親王の実子として仏光寺二十二世門主順如上人の室となった。

帰り来たれば四つのかね聞ゆ。けふしもなきほどにさしあはせて、仏光寺のおほん君のみはらから正行院殿入らせ給ひて、おのれが帰りくるをたそがれの頃まで待ちあわたらせ給ひつるとて、御歌残しおかせたり。

せこが為め妹がたちぬ唐衣きませとのみも思ふ也けり

こは、あすなん殿のおほんつどひの日なれば、おのれにもまうのぼりまゐらせよと、みこのかみのあふせごとをつたへむとて物し給ひつるなれば、そのみこころのみうたなりけり。御かへしのこころ

から衣かへすくもかしこくてかへしまつらんことのはもなし

此のみはらからは、有栖川中務卿の宮のなねのみこ知足院の宮の御腹にておましくければ、此の道も中務卿の宮のみをしへを受けさせ給へれど、そはおほやげさまにて、道の八十隈とひ明らめたまはん事などはさらにあらせたまはねば、いかでとおぼす御こころにはいとあかぬことに嘆かせ給ひて、うちくおのれを召させ給へる也。かねては伴蒿蹊といふ世に名高き道知り人を、月ごとに召して御つどひのむしろも開かせ給へりし。さるに此の翁この頃いたく老いほれて、まうのぼるべくもあらずなりにたる、そのかはりにとや思しけん、又かの翁物し奉りしほどにも、ことさらにはれくしう世におし出し給はんずるみ歌をば、ひそかなる御使にて己にたゞさせ、よしあし極め明らかし給へる事年頃なりければ、己をよしと思ほしてせちにはめさせ給へるにや、知らずかし。

随応上人は、公には有栖川宮の門人であったが、実質的な指導は伴蒿蹊から受けていた。しかし、老耄のため景樹に替わった。実は蒿蹊健在のころから、特に重要な歌は景樹が添削していたのだが、それが御意にならなつて、「せちにはめさせ給へる」(熱心にお呼び寄せになる)ことになつたのであろうか、というのである。『御日記』は文化三年分を欠いており、応専連枝の景樹訪問の事実を確認する

ことはできないが、随応上人の有栖川宮入門については、寛政七年（一七九五）分に、四月二十日、二十一日の二日にわたつて詳しく書き留められている。まず、二十日は次の如くであつた(10)。

一、有栖川様より御使 山本大炊

御門跡様和歌御門入之義、此間中御内儀より御頼之趣、

御承知被成、今日目出度、御題被進候旨也。

取次 悟御吸物御酒出 御直

答。

寄道祝 御折紙ニ御染筆遊し被進。

此間中奥向より御内談之次第、左之通。

覚

一、御題兼而御贈入之事。

一、御門入為御礼御出、其已前別紙之品、以御使御進上之事。

一、御出之時者、御対面御盃事在之、尤兼而御贈入御題之和歌、豎詠草ニ御認御持参之事。

但御出無之而も不苦、然ル時ハ、以御使右豎詠

草御伺之事。

一、詠草認様別紙之通也。尤常々者、横四ツ折ニ被認候事。

御門入

干鯛 一箱

綿 三把

御樽代金 五百疋

年頭八朔

干鯛 一箱

御樽代金 三百疋

暑寒

御菓子類登 何ニ而も

右御内談之義、御門入御樽代等者、一度之儀ニ候間、右之趣可被進、年朔義ハ百疋ツ、被進度之旨、御承知被成候。尤御内々奥向より御取計ニ付、和歌方役人江御付届被遣候ニ不及御相对也。

翌二十一日、使者稲田隱岐守が、熨斗目半上下で、随応上人の「寄道祝」の詠草、および取り決めどおりの干鯛一箱・綿三把・御樽代金五百疋を持参した。

その後、上人が有栖川宮家の門人として和歌にかかわっていることを示す記事が『御日記』の所々に見える。一例をあげる。

一、有栖川様江和歌御門弟ニ付、当年より八朔部御祝儀御肴料金百疋被進之。但奥より文使ニ而八朔ニ参候。

(寛政七年七月二十九日)

次のように有栖川宮家の歌会始に和歌を求められてもいる。

一、有栖川宮様より左之通

来ル十五日御家和歌御会始被催候。御詠出之義頼思召候。尤当日午刻迄ニ御詠進被進候様頼思召候事。

中務卿宮御使

島津弾正

二月

右御題 短冊ニ

松竹増春色 来ル十五日

(寛政十一年二月七日)

「歌日記」にいう伴蒿蹊の招聘も、『御日記』に出ている。その最初は寛政二年（一七九〇）二月十六日の次のような記事である。

一、伴蒿蹊、歌道委敷もの、由、御聞及ニ付、被召度思召、帯刀応対ニ参。

景樹の「歌日記」の記述からは、まず随応上人の有栖川宮への入門のことがあり、それに飽き足りず蒿蹊が招かれた、そしてその蒿蹊が年老いたので景樹と交替した、といった印象を受ける。しかし、『御日記』によるなら、蒿蹊招聘は有栖川宮への入門の五年前のことである。そして「歌日記」によればその蒿蹊招聘の流をうけて景樹が呼ばれた。「歌日記」は有栖川宮入門を「おほやげさま」であり、自分が召されたのは「うちく」のことだと言っているけれど、こうした経緯をみると、たしかに有栖川宮家への入門は、随応上人にとつて蒿蹊・景樹招聘とは別種の事柄であつたように思われる。ではなぜ随応上人は有栖川宮に入門しなければならなかつたのか、別途に考察が必要であろうが、それはさておいて、上人の嗣子二十四世門主の随念上人もまた景樹に就いた。その入門に関して、『またぬ青葉』に次のようにある（11）。冒頭の「十四日」は文政三年（一八二〇）四月十三日である。

十四日、今日俄に仏光寺の君、いらせ給ふべしとて、法橋せいくわんなど、これかれ来つどひて、のゝしるめり。

（中略）

ひつじの時ばかり、新門主の君ともなはせて、いらせ給ふ。

（中略）

御はらから正行院の君も、みこ鶴丸君つれて、したがはせ給へり。新門主も鶴丸君も、おひすがひたる御齡に、今はおとなだち給うれば、あらためて我道に入らせ給ふべき名簿うち

く今日ついでに、とりおこなはせんとや。御坐の間いとせばきに、ひろぶたやうのもの、人々はこびまかなひわづらふめり。やをらかづけ給ふ御袖に、いたゞくかしら打もまるぶべし。今より世中の曲みたる道をふみかへて、そのの岡べによせおき侍らば、むげにおのれらごとき愚昧の入道には、よもなし給はじなど、打ゑまひ宣はず。すべてかしこしともかしこう、おほけなきわざなりや。

「仏光寺の君」は随応上人、「新門主の君」が随念上人である。そして、随念上人自身の次のような歌も伝えられている。「真導」は上人の諱である。

○真宗法主真導君より給はりける

こたび善敬に大かたならぬ事のみをおほせて

本よりもたのむ誓ひはちかひにてうき世のことは君にまかせん

（『東塙亭話』（12））

#### 四 仏光寺と香川景樹 その二

随応・随念の二代にわたる門主、そして応専連枝と景樹との関係は、上述のようにきわめて密接であつた。しかし、『御日記』を見ると、景樹と仏光寺とのかわりはそのみにとどまらないことがわかる。『御日記』に景樹が頻出するというわけではない。『御日記』が景樹にふれる回数、は「歌日記」が仏光寺にふれるのにくらべてはるかに少ない（13）。『御日記』は、門主の日常に逐一ふれるわけではないし、あくまでも寺院の日誌であつて、法務・寺務については詳しくとも、いわば俗事に属する和歌にかかわる事柄など記さないのが原則であつたのではないかと思われる。重要なのは景樹自身が登場する回数ではなく、「歌日記」に見える人物や寺院が次々に御

日記』に出てくる、ということである。

たとえば、景樹の友人で、神道に基づく独自の歌論が景樹に影響をあたえたと言われている富士谷御杖（文政六年（一八二三）没。五十六歳）である。御杖は、次のように「北辺」「御杖ぬし」として、またほかに「富士谷御杖」「富士谷氏」として「歌日記」に合計五回出ている。

十九日。正阿弥にて北辺会。松五株あり

子日せし松のいつもといつもくかはらぬ千世の陰にくらさん

(略)

菊の花に御杖ぬし

とかけるかたはらに

移りけんころとは菊の花なれどわがきぬうつにいとまなきはや  
(文化十四年三月)

『御日記』において御杖は、柳川藩立花家の京都留守居役という役柄上であろう、次に掲げられるようにしばしば使者として仏光寺を訪れている。また、仏光寺からの使者を、取次役として応接している。なお、富士屋の「屋」は原本のままである。「富士谷」は現在「ふじたに」と読まれているが、仏光寺においては「ふじや」と認識されていたらしい。

一、立花左近将監殿 富士屋千右衛門より左近将監殿御子息龜

寿殿事、如願嫡子成被仰出候、御吹聴。

御使 主計

一、松平越後守殿へ御歎

御太刀 一腰

取次 平ノ兵四郎

御馬代 一枚

一、立花左近殿同人御歎御口上

取次 藤谷仙右衛門

(寛政十一年十二月二十九日)

江戸における桂園派の主要歌人の一人である児山紀成もまた、仏光寺とのかわりを有する一人であった。『御日記』寛政二年（一七九〇）六月十日に、

一、庄野宿早川嘉十郎次男田藏事、兼而依頼

御側へ出勤今日より被召出、勇と改名。十二才実十四。

とある早川勇が紀成である。

紀成について、現在普通に知られているのは次のようなことである。

〔生没〕安永六年（一七七七）生、天保十一年（一八四〇）四月二十七日没。六十四歳。墓、江戸駒込栄松院。〔名号〕初め早川氏。名、紀成。通称、勇・直次郎・新八郎・勝之進。号、梅園、愛松軒・四生。法号、桂心院還誉真解居士。〔家系〕早川直記の男。幕臣児山可至の養子。〔経歴〕伊勢鈴鹿郡庄野に生まれる。文化三年（一八〇六）江戸に出、蝦夷地御用掛夏目長左衛門に抱えられ択捉島へ渡った。同十一年、児山氏の養子になり、江戸目白台に住した。天保十一年隠居。初め伴蒿蹊・有賀長収に国学・和歌を学び、のち香川景樹の門に入った。景樹の江戸下向は紀成を頼つてのものという。

〔国書人名辞典〕（14）

児山紀成は初め早川氏であったことが知られているうえに、『御日記』の早川田藏と、出生地、生年、勇という通称が一致する。早川

田藏、改名して早川勇が児山紀成その人であることは確実であろう。井上通泰「桂園叢話 第一篇」(15)に、紀成について、「前後二妻あり、前妻は父方の叔父松村采女の養女なり、名をとくと云ふ、文政十二年十一月没す、采女は京師佛光寺の臣なり、紀成も若きほど佛光寺に仕へたりしことありと云ふ」とあるのは事実であったことが確かめられたわけである。松村采女の名も『御日記』に見える。次に引く「歌日記」のように、「正行院の君」すなわち応專連枝の内意を紀成が景樹に伝えたというのも、右のような経歴からしてごく自然なことであろう。

正行院の君、いとのだやかなる日を見つくるひ給ひて御輿入らせらるべうなど、うちくおほせごとありつることとを、紀成ぬしほのめかしおきつれば、待ち奉らずしもあらぬに、きのふけふことさらにのどやぎて見たしもいとおもしろかりけるによめる

君くやとけふも岡辺の松ばらに立ちくらしける春霞かな

〔歌日記〕文化二年二月四日

御杖にせよ紀成にせよ、仏光寺とのこうしたかかわりが、直接景樹と相知る、あるいは親交を深める機縁になったかどうか確認はできないが、その可能性はある。

## 五 仏光寺と香川景樹 その三

真宗の門跡寺院である仏光寺は、庶民とかわるその一方で、公家・大名との交渉も有していた。たとえば、先に引いた「歌日記」文化四年正月九日にもあったように、随応上人の母の知足院宮は有栖川宮織仁親王の姉であったし、室の聞名信院は、伊勢国安濃津の藤堂和泉守高嶺(たかさと)の一女であった。いちいち引かないけれ

ど、有栖川宮家、藤堂家ともに『御日記』に頻出する。「歌日記」享和三年(一八〇三)の、

二月二日。勢州藤堂家会始。兼題

春風来海上

大島の鳴戸を春やわたるらん朝おろし社あらたまりけれ

のような、藤堂家と景樹との関係は、その縁によるもの、さらに次のような伊賀国名張の藤堂家との関係もまた、仏光寺を仲立ちとして生じたのではないかと考えられる。

伊賀名張藤堂宮内室含子へ歌の道とき示し給ふうち  
含子 来て見れば庭の呉竹打なびき野への蛙のこゑもき  
こゆる いつよりか思ひしことの今日こそは叶ひしこと  
の嬉しかりけれとよみて出されたる、かたはらに書付給  
へる歌

おもふこといへば答へし山びこの高きこゑこそうれしかりけれ

わが道にやがて靡きし呉竹のよにあやしきは契なりけり

〔歌日記〕文化十二年四月。日未詳

『御日記』には「歌日記」に出てくる僧や寺院も多く載っている。「歌日記」享和元年(一八〇二)正月六日に次のように見えて以後もしばしば登場する恵岳は、つづいて引く『御日記』にあるように仏光寺の御堂衆(16)であった。

六日。去し冬、易得亭の翁より、やつがれが歌のふりふるくみやびにたり、かゝるさまよみいつる人もいできにけれ、同じ道に思ひ入りし身のうれしさにたへぬ事をしもふりはへい

をひつたへてよと、惠岳法師をしてその事のみいひおこされた  
に(後略)

(「歌日記」享和元年一月六日)

一、御堂衆御礼。於御書院御盃松台御着被下。

入真寺 則元 惠岳 栄雲 円教 善明寺

(「御日記」寛政十年一月一日)

「歌日記」の「易得亭」すなわち伴蒿蹊は、先に記したように寛政二年から仏光寺に出入りしていた。蒿蹊の言を惠岳が伝えたのは、二人に仏光寺を仲立ちとする結びつきがあったからではないかと推測される。

寺院の例としては、たとえば「称徳寺」がある。この寺「歌日記」に、一例をあげるなら次のように、合計五回出ている。

廿四日。称徳寺来ませり。これもあす越後へ帰るとて歌

乞はれけるに、まづ近江まで下りて、そこにて年こえん

もはかりがたしといへば

いに果ん君にし有ねど逢坂の関のあなたはかひもなき哉

おなじくは都にかへれかへる山雪にはみちもあらじとぞおも

ふ

(享和二年十月二十四日)

この越後の「称徳寺」は、次のような理由で、現新潟県三島郡寺泊町荒町の真宗仏光寺派寺院「聖徳寺」であると推測される。

まず、これら二首と同じ歌が『桂園聚葉』雑の部に載っており、その詞書は次のようになっている。

師走の末つかた、越後寺泊なる円雅法師、都を立て近江国まで下り、故郷へ帰らんは年をこえんもはかり難しといふに

これによれば「歌日記」の「称徳寺」は「越後寺泊なる円雅法師」と同じ人をさしている。そして『御日記』に、「越後寺泊聖徳寺円雅」が出ている。

一、越後寺泊聖徳寺円雅、去ル九月下旬より上京。

(寛政二年十二月三日)

したがって「称徳寺」は聖徳寺である。そして円雅は、『佛光寺学匠寮の伝灯と史料』(17)に、法名「願海院 积円雅」、庵号「心水閣」、寺院名「新潟・寺泊・聖徳寺」、往生年月日「文政元年七月二十七日」、享年「七十一歳」とある、円雅その人に違いない。また「歌日記」文化十三年二月十六日に次のようにある「心水閣」も聖徳寺円雅をさしていることがわかる。

仏光寺君より御着給はりける御返しに

仰ふみのやういとかたじけなく押し侍りぬ。さるに越の

寺泊よりはるく奉りしづりの大うを、風味ことさらな

りとてその一櫛下し給り、誠に折からの花よりも幾重か

珍らしく

かしこくもいたゞく袖にかをるかな君が裾わけ吹おくる風

もしこは心水閣のあたりよりもし奉りけんかと、いと

ゞ外ならずもなつかしみ侍りて

常こふるかの法師の寺どまり久しぶりにもきくたより哉

さはとまれ大海のはらよりもいと深き御こゝろざしの有

がたさを、まうのぼり申奉るまでよくくとりつくろひ

給ひねと申。穴賢

きさらぎ十六日

惠岳のきみへ

景樹拝

かへし参る

寺院の例をもう一つ付けくわえておく。撰津国勝間（こつま。現大阪市西成区玉出）の光福寺は、景樹が難波に赴いた際には、次のように、必ずといつていいほど立ち寄り宿泊する寺であった。

三十日。けふ勝間の光福寺に行く。かはほりの飛ぶを見てみなよむ。

墨染の夕べになればかはほりの空にみだれて物ぞ悲しき

こよひ当座あり。籬虫

わが宿の籬の下にきりぐす鳴きあかしたる声ぞ聞ゆる

（「歌日記」文化三年八月三十日）

拙稿「香川景樹「歌日記」の因幡と因幡人」（18）にも引いた、景樹が同郷の稲村三伯を訪問した際の記事（文化五年五月九日）にも光福寺は出ている。この光福寺も真宗仏光寺派の寺であつて、『御日記』にも、たとえば「川並福応寺、堺光林寺、勝間光福寺江御酒被下候」（文化六年一月十九日）、「撰州勝間光福寺、去月廿日ニ狼藉物入込候ニ付、御届書宿坊江差出候ニ付、西坊より書付持参御届有之。追而御沙汰可有旨申、一先門下兩人帰村、宿坊を以申付候」（文化五年十月十四日）のようにその名がみえる。

以上、『御日記』と「歌日記」の両方に載っている人物や寺院のを取り上げてみた。ほかにも多くの例がある。門主澁谷家の親縁、また仏光寺やその末寺・檀徒をふくむ真宗仏光寺派の教団組織が、景樹の交遊圏や桂園派の拡大に大きい役割を果たしたのではないかと推測されるが、それについては稿を改めたい。

## 六 仏光寺『御日記』の香川景樹

『御日記』における景樹の記事を抄出して年月日順に並べ、「歌日記」に対応する記事がある場合はそれを掲げる。必要に応じて説明を加える。【一】から【七】までのうち、【一】【二】【六】【七】は、対応する記事が「歌日記」にある（19）。したがつて「歌日記」の日付の信憑性をこれらによつて検証することができる。はじめに掲げた【一】にあたる。【三】【四】【五】は対応する記事が「歌日記」にない。『御日記』によつて新たに判明した、景樹の、仏光寺にかかわる伝記的事実である。【2】にあたる。

【一】

『御日記』文化四年（一八〇七）正月十日

一、御歌初<sup>ニ付</sup>香川長門介<sup>参</sup>。於書院御のし昆布被下。

鐘之間<sup>ニ而</sup>御祝酒。夫より奥へ参。御詩会<sup>初</sup>之通也。

「歌日記」文化四年（一八〇七）正月十日

十日。仏光寺御殿御会始にてまうのぼる。御兼題

春風解氷といふことを

打解てけさ吹風の心をば池のこほりぞまづは知るらん

同じく御当座。野若菜

（一行空白）

名所松

住のえの岸は岡ともなりぬれど松の色こそ変らざりけれ

\*『御日記』の掲出部分を（写真4）として末に掲げる。

「歌日記」に仏光寺がはじめて登場するのは享和元年（一八〇一）二月二十六日の、「常楽寺会、三条の仏光寺御苗所にてあり」であるが、『御日記』に景樹が登場するのはこの【一】の文化四年正月



十日の記事が最初である。『御日記』『歌日記』の日付は一致し、また歌会始のための参殿である点も一致している。

書院での下され物がほかの物ではなく「のし昆布」であること、酒を賜ること、また「書院」であり「鍵之間」であつて他の場所ではないことが何を意味するのか、明瞭ではない。ただ、「奥」とは門主の日常生活の場であることは想像できる。文化四年の『御日記』において、この景樹の場合と「奥」に通されたという点で類似の事例として、次の二つがある。波線を付した「御詩会初」とは①の「御詩会」であろう。

①一、御読初并御詩会。参上 中嶋織部御対面左法如例。

桂主馬御盃被下。奥向ニ而御酒等出ル。

(正月五日)

②一、御楽初。参上 安陪越中守 安陪加賀守 筑後守 □三郎。

各於書院御のし昆布被下。夫より奥ニ而御祝ひ等被下。  
桂主馬も参。  
(正月十一日)

ちなみに言えば、①②両方に登場する桂主馬は『平安人物志』文政五年版、同十三年版の「書」の部と「楽」の部に出ている人で、『御日記』によれば、表向きは輪王寺宮御家人であるが「語合」として「家来同様」に仏光寺に仕えていた(20)。

## 【二】

『御日記』文化四年(一八〇七)正月二十三日

一、御門跡様岡崎辺へ御遊行。香川長門介へ御立寄。

御徒士式人御輿脇物左内其外如例。但し御賄向

御内儀より御催也。正行院殿も御誘引。

「歌日記」文化四年(一八〇七)正月二十三日

二十三日。けふにはかに仏光寺の君いらせ給ふ。いとせめてとみのことなれば庭をだにはらひあへぬを、雪の清めがほにふりしけるぞこゝろ有ける。みはらから正行院殿もとばかりおくれいていらせ給ふ。仰にしたがひてけふの御題たてまつる。その題

春の雪

梅花ある家にまらうど来たる 此わたりの歌よみ人にも皆よませてたいまつる。君のも人のも外にしるしたれば、おのれがのみかいつく。

かきくらし日影は空に見えねども消こそわたれ春の沫雪  
珍らしき君が来ませる嬉しさに梅の花をもけふは見ぬ哉

暮れ渡りぬればさうじさしこめてみものがたりし給ふほど、みさかづきあまたゝびめぐらひ、夜もなかばたけぬめり。さて帰り給はんとてまらうどぎねの君よみいだし給へる。

此宿を君いなみなばいかにせん道の長手を雪にあへる日

みあかりさゝげつゝみかへし奉る。

此宿はわがやどならず鶯の君まちえたる花の宿なり

\*『御日記』の掲出部分に日付もあわせて〔写真5〕として末に掲げる。

随応上人の景樹宅訪問の記事は、『御日記』『歌日記』ともにこの文化四年正月二十三日が最初である。『御日記』『歌日記』の日付は一致している。また、『御日記』は日付の下に原則として当日の天候を記すが、この日は、「晴。昼後曇。折々小雪」となっており、雪が降ったことも両者一致している。景樹は享和三年(一八〇三)

十一月に「岡崎道伴屋敷御旧宅の辺」（享和三年十二月十二日桃沢夢宅宛書簡）に転居し、この頃もそこに住んでいた<sup>(2)</sup>。「御賄向御内儀より御催也」は、酒食は景樹ではなく上人側が準備した、という意味であろうか。よくわからない。「正行院殿」は、第三節の初めに引いた「歌日記」文化三年正月九日に出ている、随応上人の弟の応専連枝である。応専連枝の景樹宅訪問の記事は、『御日記』ではこれが最初、「歌日記」は文化二年（一八〇五）四月二十三日が最初である。

### 【三】

『御日記』文化五年（一八〇八）十一月十七日

一、香川長門介参 殿。奥へ通ル。

「歌日記」

なし

\*『御日記』の「参」「殿」の間の一字分の空白はもとのままで、敬意を示す闕字である。

「歌日記」の文化五年の分には、この仏光寺参殿の記事のみではなく十一月の記事がない。この年、元日から閏六月十八日まで、ほぼ月日の順にしたがっている。しかし、その後ろに、「ことしは日次みだれてみなしられねば、思ひいづるまにくく左にみなかいつく」とあり、まず「贊の分」として、八月十七日（一首）、八月五日（二首）、八月二十日（二首）、六月二十日頃（二首）、日付なし（二首）が記されている。そしてその次に、「ふづきの十五日にやあらん」「同じく十六日」「同じはつかまり三日の日なりけん」と、それぞれ垂雲軒、赤尾可官、常楽寺を訪問し、次に「近き松や」において当座

開催の記事があつて、この年は終わっている。

なお、右の「同じはつかまり三日の日」すなわち七月二十三日に、「阿元師をともなひて常楽寺へ行く道にて三首の題を分つ」とある「常楽寺」は、仏光寺御堂衆の恵岳（第五節参照）、または恵岳がその寺名を名乗り用いた京都の仏光寺派寺院常楽寺をさす。またつづいて、「いきて見れば西徳寺 福応寺のふたりも来ましたり」とある「西徳寺」「福応寺」は、ともに『御日記』に頻出する仏光寺派寺院の名で、おそらくその住職をさしている。

### 【四】

『御日記』文化六年（一八〇九）一月二十日

一、御歌初<sup>ニ付</sup>香川長門介参上。御側<sup>ニ而</sup>御酒被下。

「歌日記」

なし

\*『御日記』に対応する歌会始の記事が、「歌日記」に見えないことには注意を要する。「歌日記」文化六年分は、月日の順を基準にして見ると記事の配列が全体としては大きく乱れているが、冒頭の二月二十五日までは、元旦からはじまり、二日、三日、四日、七日、十日、十三日、十五日、十七日、十八日、二十五日と続き、二月も、五日にはじまって二十五日まで時間順に整然と配列されている。したがって、これだけを見ると、元旦から二月二十五日までの間、記事がない日には特記すべき出来事や歌がなかったという印象を受けるが、実は二月十八日と二十五日との間にこの仏光寺の歌会始があったのである。このことは、「歌日記」において、六日も間隔があいていれば、前後の記事の配列に時間の乱れはなくとも、重要事項

が欠落している可能性があることを示している。もちろんすべての場合に当てはまるわけではないであろうが、そうしたこともあるということを、「歌日記」を利用するには心にとどめておくべきであろう。

『御日記』の「御側二而」の意味するところは未詳である。【一】の文化四年の歌会始の場合は、「鑑之間二而御祝酒。夫より奥へ参。」となっていた。「御側」が「奥」を意味するならば、歌会始の会式、あるいは景樹の待遇が文化四年とは変わったか、または鑑之間での「御祝酒」と「奥」「御側」での「御酒」とは別の意味をもっていることになる。今後もう少し「御側」の例を集めて検討したいと思っている。なお、楽初も、文化四年は【一】に引いたように、「各於書院御のし昆布被下。夫より奥二而御祝ひ等被下」であったのに対して、文化六年は、「御側二而御酒被下」となっているから、かりに会式または待遇が変わったのだとしても、歌会始・景樹だけのことではない(22)。

#### 【五】

『御日記』文化六年(一八〇九)三月八日

一、歌人長門介参 殿。奥へ通ル。

#### 「歌日記」

なし

\*「参」と「殿」の間の空白は【三】と同じく闕字である。景樹がこの日参殿した理由は明瞭ではない。次の【六】の随応上人の景樹邸訪問を、景樹は「おもひもかけず」としているが、参殿はこの訪問と何らかの関係があるかもしれない。「歌日記」にはこの件にか

んする記事がない。

「歌人」とあるのは、二条家侍の喜頭長門介(23)との別を意識していることであろう。この時期の『御日記』に、「二條様江御使者内記。長門介面会」(文化六年正月二十七日)のように名字の記されない「長門介」がしばしば登場するが、記述の内容から明らかに喜頭長門介をさすと解されるので、いちいち取り上げて検討を加えることはしない。

#### 【六】

『御日記』文化六年(一八〇九)三月九日

一、御所様 東山御廟参。先より高田御坊開帳等

宮様 へ被為成候事。

君様 高田御坊二而御散銭青さし五貫文。

御簾中様

「歌日記」文化六年(一八〇九)三月九日

九日の日、おもひかけず仏光寺の君の入ましたるに、庭の山吹を題にて歌よみ給ふ。やどりしたる学び子どもにもすゝめてよましめたまへば、おのれが奉れる  
かひもなきかき根にありし山吹もことしよりこそ句ひ初めけれ

こは下されたる御歌のかへしなり。その御歌は忘れたり。  
おもひいでゝかきてん。

(一行空白)

御当座催し給へるに、おのがよみし二首。

松が枝に咲ける花かと思ゆれども猶散りやすき山桜哉  
山里にすむとはすれど事しげみ花も心にまかせてはみず

\*『御日記』の「御所様」は随応上人、「宮様」は知足院宮、「君様」は千重君、後の随念上人、「御簾中様」は随応上人室聞名真院である。「歌日記」に知足院宮以下にふれるところがないのは、随応上人のみの訪問だったからであろう。

『佛光寺辞典』によれば、「東山御廟」は、京都市下京区三条通粟田口東の仏光寺本廟である。元禄八年（一六九五）に飯堂、安永四年（一七七五）に本堂が建立された。昭和二十七年の宗教法人「佛光寺」寺法制定により仏光寺本廟とされるまでは「東山別院」「東山本廟」と呼ばれていた<sup>(24)</sup>。『御日記』に景樹宅訪問のことがまったく出ていないが、「高田御坊開帳等」の「等」に含まれているであろう。

「高田御坊開帳」は未詳である。近世京都に「高田坊」と称される寺があつたらしい。『京都坊目誌』に、「高田坊ノ址 高田町是也。<sup>(25)</sup>住 時柳原坊と称せる。僧親鸞が遺跡あり。断絶する事年久し。

慶長十年伊勢国一身田専修寺（高田寺と号す）の僧堯恵其子恵隆に命し。旧地に一堂を創建し。高田坊と号す。元和三年火災に罹り。河原町二条の北に移し。其址町地となれり」<sup>(25)</sup>とある。その移転先には真宗高田派の寺があつた。『都名所図会』に、「本誓寺は河原町二條の北にあり。宗旨は親鸞聖人の弘法にして高田派也」とある本誓寺である。この本誓寺が高田坊移転後「高田御坊」と称された可能性がある。

現在、「高田御坊」は奈良県北葛城郡高田町高田の専立寺（真宗本願寺派）をいうのが普通であるが、かりにこちらが「高田御坊」であつたとして、もちろん随応上人一行が奈良に出向いたわけではなく出開帳であろう。

## 【七】

『御日記』文化六年（一八〇九）十二月十二日

一、今日、千重君様御庖瘡之御酒湯被遊候。

幾久敷日出度、内記ふくさ麻上下<sup>二</sup>而上ル。

さゝ之葉少々ツ、根赤紙<sup>二</sup>而卷 一ツ。

さん俵 一。御湯白水<sup>二</sup>而鼠之ふん 三ツ。

小豆 三つほ。御酒少々入。

御酒湯と称、かけますまね計致候而跡ハ流ス。

「歌日記」文化六年（一八〇九）十二月。日未詳

仏光寺のみとのゝ千重君のかたいものみやまひ、ことな  
くをはり給ひて、みゆひかせ給ふをいはひ奉てよめる

身そぎ河水の心にかゝりける藻は跡もなく祓へながせれいか  
に清からし

今までも千世いませとは祝ひしかどもけふしこそまことに千  
代の始なりけれ

\*「酒湯」は「ささゆ」または「さかゆ」といい、庖瘡が治つた際に湯を浴びせること、またはその湯のことで、「笹湯」とも書く。その具体的な次第がうかがわれる貴重な記述であるが、ここで重要なのは日付である。十二日がその「酒湯」であるなら、景樹がその祝いの歌を詠んだのは翌十三日であつたとしても不自然ではない。「歌日記」におけるこの記事は、「おなじく十三日のあした」すなわち十二月十三日の次に日付なしで置かれている。「歌日記」において、日付のない記事は直前の記事と同じ日のことである場合が多い。これも十三日のことと解してよいのではないかと思う。

注（一）彌富濱雄編『桂園遺稿』上巻・下巻（五車楼 明治四〇年三月・同

八月)

- (2) 「香川景樹『歌日記』の「年づけ」——『桂園聚葉』を手がかりとして——」(『鳥取大学教育学部研究報告(人文・社会科学)』第四十七卷 第二号 一九九六年一二月)
- (3) 兼清正徳『熊谷直好伝——封建末期の一歌人の生涯——』(熊谷直好伝刊行会、昭和四〇年五月)、拙稿「鳥取県立図書館所蔵香川景樹の手紙一通——『花の跡』の成立時期について——」(『鳥取大学教育学部研究報告』第四七卷第一号 一九九六年八月)
- (4) 澁谷有教編『佛光寺御日記』第一卷(本山佛光寺 昭和六一年一月)
- (5) 村山修一「妙法院日次記」(『日本歴史「古記録」総覧』新人物往来社 一九九〇年一月)
- (6) 千葉乗隆・梨本哲雄監修 平松令三編『佛光寺の歴史と信仰』思文閣出版 一九八九年三月)
- (7) 山本嘉将『香川景樹論』(育英書院 昭和一七年一二月)、黒岩一郎『香川景樹の研究』(文教書院 昭和三二年一〇月)ほか。
- (8) 「歌日記」の引用は、『桂園遺稿』上巻・下巻により、私に句読点・濁点を加える。
- (9) 芝葛盛ほか編。高松宮家、昭和一三年六月。
- (10) 『御日記』の引用は、寛政十二年までは前節に掲げた『佛光寺御日記』により、一部表記を改めた。それより後の未刊行年分は仏光寺所蔵の『御日記』原本により、私に句読点を付した。文字の大小、配置は印刷に便宜により、原本のままではない。
- (11) 佐々木信綱編『香川景樹翁全集』上巻(続日本歌学全書第四編 博文館 明治三二年六月)による。
- (12) 尻山紀成筆記。国文学研究資料館マイクロフィルムによる。
- (13) 「歌日記」の享和元年から文化六年までに、「仏光寺」「仏御殿」「仏光寺の君」など、明確に仏光寺または随心上人をさす語をふくむ記事は三十三条、「正行院の君」など応専連枝をさす語をふくむ記事は十

条ある。一方、『御日記』の文化六年までに、景樹の名が見える記事は五条である。

- (14) 市古貞次ほか編『国書人名辞典』第二卷(岩波書店 一九九五年五月)
- (15) 井上通泰編『桂園叢書 第一集』(有斐閣書房 明治二五年六月)
- (16) みどうしゅう。澁谷有教編『佛光寺辞典』(本山佛光寺、昭和五九年三月)によれば、仏光寺両堂(本堂・太子堂)に勤仕する僧である。『御日記』によれば、代参、別院・末寺などの寺院への使いも勤めた。
- (17) 佛光寺学匠寮編『佛光寺学匠寮の伝灯と史料』(本山佛光寺 平成一〇年一月)
- (18) 『鳥取大学地域科学部研究紀要』第四卷第三号(二〇〇三年三月)
- (19) ただし、【六】【七】は『御日記』に景樹の名は出ていない。内容から「歌日記」の記事と対応すると判断した。
- (20) その出入りの初めにつき、『御日記』寛政十年(一七九八)七月五日に次のようにある。

桂主馬 手跡能相学候者之由、兼々中山安石申上候<sup>ニ付</sup>、今日御館入被仰付、御目見御口祝被下、於御前数々認物相勤、御肴一折<sup>折<sup>し</sup>まり</sup>差上、御祝儀三百疋被下、且御内々より金貳百疋<sup>ツ</sup>、御吸物 御酒被下

尤表向ハ輪王寺宮御家人之由<sup>ニ付</sup>、御当家<sup>ニ</sup>御家来同様御取扱之約束、御供<sup>ニ</sup>モ可罷出由也、<sup>御歌<sup>御</sup>に<sup>御</sup>濟出<sup>ス</sup></sup>
- (21) 景樹の住居については、山本嘉将『香川景樹論』(注7)、中野稽雪「香川様屋敷」『洛味』第二一八集 昭和四五年一二月。中野義雄編中野稽雪遺稿集『里のとぼそ第五集 小澤蘆庵の真面目』私家版

昭和六〇年九月)参照。また拙稿「香川景樹『歌日記』の「年づけ」」(前出。注2)においても言及した。

(22) 詩会初・読初は文化六年の『御日記』に明確にそれとわかる形では記載されていないため、文化四年と比較できない。正月十日に、「御対面 中嶋織部 石井多仲 桂主馬」とあるのがそれと推測されるが、その式次第はわからない。

(23) 正宗敦夫編纂・校訂『地下家伝』(自由日报社 昭和四三年二月)によれば、名は時富、文化四年(一八〇七)石見介より長門介に転じ、文政七年(一八二四)左兵衛少尉に任ぜられた。文政十二年四月没。六十八歳。

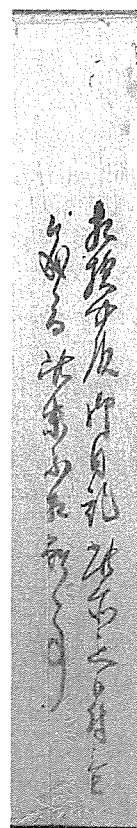
(24) 以上、澁谷有教編『佛光寺辞典』(本山佛光寺 昭和五九年三月)による。

(25) 野間光辰編『新修 京都叢書』第一九卷(臨川書店 昭和四三年七月)「第二十四学区之部」一三四頁による。同「第二十六学区之部」専修寺別院の項二九二頁にも「高田坊」についての記述がある。

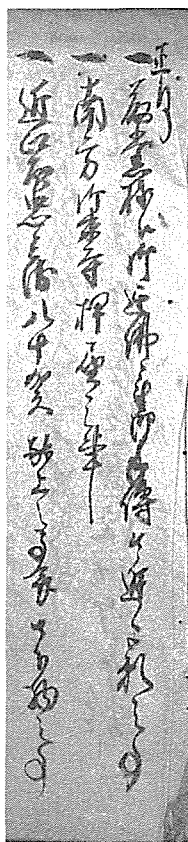
〔付記〕

『御日記』をはじめとする仏光寺所蔵諸資料の閲覧につき、澁谷曉眞門主と御家族に格別の御配慮を戴いた。ここに記して深謝申し上げる。

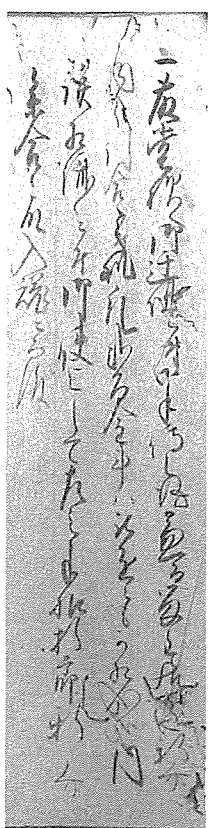
〔写真1〕『御日記』享和二年 識語



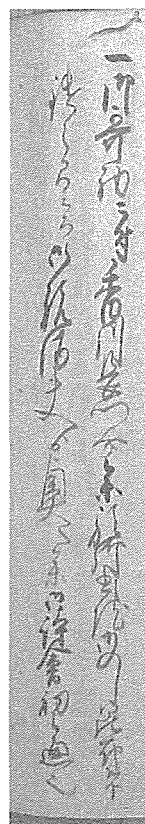
〔写真2〕『御日記』享和二年 目録冒頭



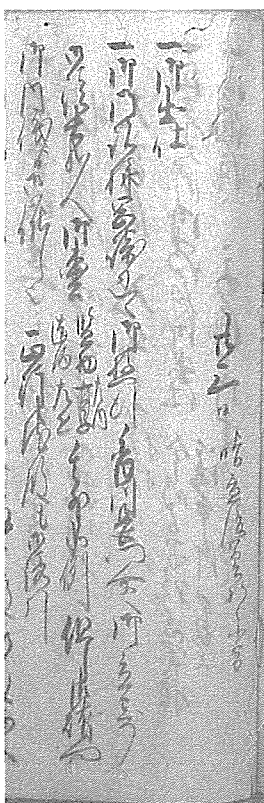
〔写真3〕『御日記』享和二年正月九日



〔写真4〕『御日記』文化四年正月十日



〔写真5〕『御日記』文化四年正月二十三日



〔鳥取大学教育地域科学部紀要〕(教育・人文科学) 第五卷第一号

平成一五年五月三〇日

# 仏光寺『御日記』の香川景樹

——文化七年から九年まで、文化十二年から十四年まで——

田中 仁

## 一 はじめに

真宗仏光寺派本山仏光寺所蔵『御日記』の、文化七年（一一八一〇）から同十四年までのうち、現在所在不明の十年、十一年をのぞく六年分<sup>(1)</sup>から香川景樹の登場する記事を抄出し、景樹の「歌日記」<sup>(2)</sup>と対照する。「仏光寺『御日記』の香川景樹——文化六年まで——」<sup>(3)</sup>の続きで、目的も同じく香川景樹「歌日記」の年月日付けの検証と景樹伝にかかわる新事実の発掘である。したがって、『御日記』にあつて「歌日記」には対応する記事がない場合は、『御日記』の記事を抄出してその旨を注記するが、逆に「歌日記」にあつて『御日記』にない場合は取り上げない。「歌日記」の年月日付けの検証という点から見れば、「歌日記」と対応する記事が『御日記』にないことに特に取り上げて云々するほどの意味はないし、二つの日記を対照して新事実を発掘するという点からみても、すでに周知の資料である「歌日記」と対応する記事が『御日記』にないということに、やはり特に取り上げるほどの意味はないからである。

## 二 問題点二つ その一

ただし、前者の「歌日記」年月日付けの検証、後者の新事実の発掘について、処理に迷う場合が一種ずつある。先ず前者について言えば、「歌日記」と同じ事柄を伝えていると考えても不自然で

はない記事が、『御日記』にも見えるものの、両者は対応している、同じ事柄の記述だとまでは言い切れない、一例をあげるなら次のような場合である。『御日記』引用は本山仏光寺所蔵原本により、句読点を加える。また「歌日記」の引用は彌富濱雄編『桂園遺稿』により、句読点・濁点を加える。

『御日記』文化九年（一一八一）五月二十三日

### 一、御所様計

本光寺へ御成被為在候。

朝五ツ半より。

御機嫌能還御被為在候。

夜九ツ半刻。

御先番 大蔵卿

兵部

御供 正親

矢柄

□二郎

「歌日記」文化九年月日未詳。夏か

仏御殿御当座 泊水鶏

ねられねば舟ばた叩き諷ふ夜に水鶏も声を合せがほなる



同 望遠帆

はるかくと湊をさして入舟の真帆に受たる夕日かげかな

『御日記』の「御所様」は仏光寺第二十三代随応上人である。「大藏卿」は二條家侍の稲田隱岐守政幸男で仏光寺坊官の稲田政観、「兵部」は仏光寺家司の小幡兵部、「正親」と「矢柄」は仏光寺近習である。近習は門主の身近に仕え、諸方への使者、諸方からの使者の取次、またこの場合のように門主や門主家の人々の外出の供などをとめた。「□二郎」の□は「榮」か「米」のように見えるが判読できない。

「歌日記」の「仏御殿」は仏光寺またはその主の随応上人をさして用いられている。ここでも「仏御殿御当座」は仏光寺で開かれた歌会の当座、または随応上人主催で開かれた歌会の当座、の意であろうが、二首はともに当座の歌であって兼題の歌が掲げられていない点が注目される。この歌会に兼題はなかったことを示しているのではないかと思われるからである。

兼題がないということは、この歌会が前もって準備されたものではなく、随応上人の本光寺御成という偶発的な機会を得て臨時に開かれた、

十四日。仏光寺の君、近き本光寺に入らせ給ひて御当座あり。

朝霞

高砂のをのへの松に朝がすみ匂へるみれば日は出にけり

(「歌日記」文化五年二月)

などと同様の会だったと推測させる事実である。「本光寺」は、第四節の【一〇】に記すように、現在の京都市東山区岡崎法勝寺町にあった寺で、「歌日記」によれば仏光寺にかかわる歌会に用いら

れることがあった(4)。また、一つの題のうち「泊水鶏」は、『桂園和歌類題集』も夏の部にこの歌を収めているように明らかに夏の題である。この「仏御殿御当座」は五月二十三日に本光寺において開かれたものであった、というのは不自然な推測ではない。

しかし、いっぽうで、右に引いた文化五年二月十四日などは違う「仏御殿御当座」という名詞化した評言は、これが定期的に開かれていた会であり、景樹は毎回その当座の題によって歌を詠んでいたことを暗示しているようにも見える。具体的に言えば、「仏御殿」は仏光寺の意であり、「仏御殿御当座」とは仏光寺において開催された月次の歌会で出された当座題を、いつものように後に聞かされて詠んだ(5)、といったことなのかもしれない。

また、何よりも、「歌日記」に月日が明記されていない点が、対応していると言いつれもない決定的な要因である。逆に言えば、もし「歌日記」に「仏御殿御当座 五月二十三日 泊水鶏」のように、「御日記」と一致する月日が明記されていたとしたら、『御日記』に景樹の名はなくとも両者が対応していることは確実と言ってよいであろう。前稿の【六】【七】、本稿の【一〇】はそうした事例である。しかし、この場合のように、『御日記』に景樹の名がなく、「歌日記」に月日がないとなると、本光寺が仏光寺関係の歌会に用いられることがあったこと、季節がともに夏であったことだけで、両者は対応していると言いつれもない。

### 三 問題点二つ その二

次に、後者の新事実の発掘については、たとえば次のような場合が問題である。

『御日記』文化十三年(一八一六)三月二十五日

安住台へ御所様御内々ニ而午半刻比より御成。還御寅刻。

### 「歌日記」

なし

この『御日記』の記事に景樹の名は出ていない。しかし景樹がかわつていた可能性がある。

その点で注目すべきは「安住台」である。どこにあったのか正確にはわからないが、随応上人が東山の仏光寺本廟に廟参後、「還御掛（かんぎよがけ）」にここに立ち寄った、という記事が『御日記』に時々見えることから、本廟または本山近くか、または本山と本廟との間にあったと推測される。

文化十三年の頃、この安住台は随応上人の弟である応専連枝の住まいだったようである。澁谷有教編『佛光寺辞典』<sup>(6)</sup>の「応専」の項に、「文化八年別院安住台に遷り」とある。また『御日記』文化十二年十月十六日に、二人の僧について、

御役僧ニ被召抱候ニ付

安住台 院家衆 御堂衆 常仕へ為知申遣ス。

という記事がある。「院家衆」とは、本山仏光寺につぐ寺格を有する、光蔭院、大善院、長性院、教音院、久遠院、昌蔵院の六院の住職である『佛光寺辞典』。これら院家衆より上に記されるのは、この文化十三年の時点では応専連枝以外には考えられない。この頃「安住台」は応専連枝の呼び名にもなっていたのである。

「歌日記」によるとこの安住台も、本光寺と同様に、たとえば次のように歌会に使用されることがしばしばであった。

六日。安住台御当座。萩見のみつどひにて御門主も入り給ひたるに折ふし野分して雨はげし。  
(文化四年八月)

もつとも、それは「歌日記」によるかぎりでは文化四年八月までのことではある。その後は文政六年の随応上人の追悼会まで、「歌日記」に安住台における歌会の記事はない。このことはおそらく、「歌日記」文化八年（実は文化六年）<sup>(7)</sup>八月に次のように記される事態と対応している。「正行院の君」は応専連枝その人である。

二十日。仏光寺の君のみはらから正行院の君とひ来ませり。けふきませる故は法の道踏分け給ふにことのはのこみちありては一筋ならであらぬちまたにも行迷はんおそりなきにあらず。今よりこの道をば捨侍りなんと思ひ成ぬるを告申さん云々などのたまはず為なり。(以下略)

この文化六年の四月に、応専連枝は大僧都に任じられている<sup>(8)</sup>。歌道放棄の宣言はこのことと無関係ではないと推測されるが、その当否は別として、もし応専連枝の歌道放棄宣言と「歌日記」に安住台における歌会の記録が見られなくなることが結びついていたら、安住台は文化八年の移徒以前にすでに応専連枝の住まいになっていたのではないかと思われる。

それはともあれ、応専連枝の歌道放棄宣言、あるいは歌道放棄を宣言した応専連枝の安住台移徒によって、しかし、安住台と和歌・景樹とが無縁になったわけではない。『御日記』文化十三年正月十九日に次のようにある。傍線を付した「香川」は景樹、「常楽寺」は景樹と親しかった恵岳<sup>(9)</sup>である。

#### 一、御所様

青蓮院宮様江御成。

(中略)

直様

東山御廟参

(中略)

先より安住台へ御成

八ツ半より君様安住台へ御成

御供 兵部

一馬

正親

先方様へ

香川

常樂寺 参り候由

『御日記』によると、随応上人は、このほかにも折にふれて、時には千重君(後の仏光寺二十四代随念上人)も伴い、安住台に出向いている。たとえば次の如くである。

一、御所様

君様

安住台へ御成被為在候。

御供兩人

御包輿三人

御徒士兩人

御草り口帯壺人

合羽籠壺人

押壺人

七ツ半時より御成被為在候。

各御供帰り、御迎三行。

(文化九年八月十四日)

一、御門跡様巳ノ刻半

羽織袴敷

安住台へ御成。

一馬

左内 貞次郎

(同十二年四月五日)

こうした際に、景樹が呼び寄せられ、略式の、当座題だけの歌会が催されたと考えるのは、決して不自然ではないであろう。「御内々」がいつそうその気配を感じさせる。そして、もしそうであったとしたら、これは景樹にかかわる従来知られていなかった事実である。

しかし、景樹の名が見えず、「歌日記」にも対応する記事がない以上、推測はあくまでも推測にとどまる。景樹とはまったくかわりのない何らかの用件で、あるいはとりたてて用件はなくとも、随応上人が弟の、千重君が叔父の応専連枝に会うために安住台に出向くことがあり得ないはずはない。

前稿・本稿ともに、『御日記』に景樹の名が出ている場合と、景樹の名は出ていなくとも「歌日記」に対応する記事があり、景樹がかかわっていたと明らかに推測される場合とのみを取り上げた。つまり、比喩的に言えば、景樹の姿が明白に見える事例のみを取り上げた。今後も同様の基準によって仏光寺『御日記』の景樹関係記事を拾っていく予定である。しかし、実はそれらと連なっている姿がほとんど明白なものから、微かに気配が感じられる程度のもので、仏光寺『御日記』に景樹は様々な形で存在しているのである。それらの中には単なる思いこみ、錯覚による幻影のような例もあるであろうが、すべてそうだとも思えない。

「歌日記」には、仏光寺だけではなく、仏光寺にかかわる、たとえばすでにふれた本光寺や安住台など、また越後国寺泊の聖徳寺や撰津国勝間の光福寺など、さらにまた藤堂家や有栖川宮家、富士谷御杖や児山紀成、恵岳などの、仏光寺にかかわる寺や家、人物が登場する。そして『御日記』にも同様に、景樹その人のみではなく、景樹にかかわる右のような寺や家や人物が登場する(10)。仏光寺と景樹との関係は、それらを総合し比較対照することによってはじめて明らかになってくるはずである。『御日記』の記述

から感じ取られる景樹の姿が、幻影にすぎないのか実体をともなっているのかも、その時に今よりは多少なりともはっきりわかってくるであろう。そのための準備として、今は明白な仏光寺『御日記』から、明白な景樹の姿を拾いあげていきたいと思っている。

#### 四 仏光寺『御日記』の香川景樹

仏光寺『御日記』の景樹関係記事を、上述のような基準によって抄出し、年月日順に並べる。「歌日記」に対応する記事がある場合はそれを併せて掲げ、ない場合は「なし」とする。文字の大小、配置は印刷の便宜にしたがい必ずしも原本のままではない。『御日記』の判読できない文字には仮に□をあてておく。割り注など一行分に二行書かれている部分は「」で括って示す場合がある。記事の内容等につき、必要に応じて\*を付して説明を加える。なお、【】で括って示す番号は、前稿からの通し番号である。

#### 【八】

『御日記』文化七年（一八一〇）正月十九日〔写真1〕

一、御所様東山へ御廟参被遊候。

青蓮院宮様江年始御成被為在候。

東山相濟候而香川長門介江御成。

御先番

青蓮院様へ 東山へ 内記

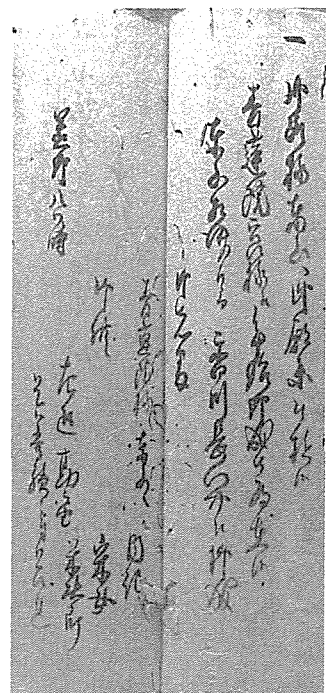
采女

御供

左近 勘解由

還御八ツ時 是ハ歌「読」ニ付御召連。

〔写真1〕



「歌日記」

なし

\*□は「榮」または「米」か。「」でくくった「読」は、字形は明らかに「統」であるが、『御日記』のこの箇所の筆者は、言偏を糸偏と同じ形に書く場合がある。これもその一例と判断した。

『御日記』によれば、左近は旧姓木村、文化六年八月に吉川主税の養子になり吉川左近と称した。近習の一人である。「勘解由」は山田勘解由。同じく『御日記』によれば、文化六年正月に「中奥□席」(り)に任じられている。「□次郎」は未詳。第二節に引いた『御日記』文化九年五月二十三日の「□二郎」と同一人物であろう。「歌読」は左近のみについて言うのか、または勘解由もふくめてのことなのか不明である。

この【八】の『御日記』の記事は、景樹の『古今集』講義にかかわって重要である。「歌日記」によれば、文化七年正月十九日は、景樹が『古今集』の講義を再開した、まさにその当日であった。

十九日。ときかけし古今集けふときそむ。夏のはじめ

より也。この十年あまり昔成けん、冬のはじめ、同じ集をときそめ侍しとき うは氷一重ばかりはとけながら紀の河よどのそこぞしらぬ、とよみしは、たとひしにはあらで、真淵といふ淵に溺れてこの集をあかぬものにおもひそしりし下ごゝろなりけり。いさゝかさとりにえたるのちは、いとかしこきえせ心になんこの紀の大みかみのいさをは柿本のかみにたてる事をしりあきらめて、口にもいひ筆にもかき、いまはたゞさらんいはれを世人しらんことをのみこひねがふも、なか／＼おそき心とや、かのみかみはみそなはし給ふらんかし。

みよし野の花とみるまで水上の昔にかへる紀の川のなみ

随応上人の景樹訪問が、普通どのような手続を踏んで行われていたのかよく分からないが、身分柄事前に日時や接待の次第、内容などにつき打ち合わせがあったと考えるのが自然で、「けふにはかに仏光寺の君いらせ給ふ。いとせめてとみのことなれば庭をだにはらひあへぬを、雪の清めがほにふりしけるぞこゝろ有ける」

〔歌日記〕文化四年正月二十三日)のような景樹の都合に頓着しない突然の訪問は、文飾か、かりに事実だとしても違例のことであつたように思われる。そうであるなら、おりもおり講義再開当日に上人の訪問があつたのは不審である。

もし訪問が事実であつたとしたら、それは講義を聴くためであつたと考えられる。そう考えれば、「歌謡」の左近(または左近・勘解由)が伴われた理由がよく分かる。しかし、「歌日記」が『古今集』講義再開に関して上人の訪問にまつたく言及しないのは、訪問が講義とは別のことであつたことを示している。とすれば、講義再開当日の訪問はやはり極めて不自然と言わざるを得ない。「歌謡」を伴うことも、景樹宅に立ち寄ることが最初から予定さ

れていたなら、『古今集』講義を聞くためではなくとも十分にあり得よう。『御日記』または「歌日記」の年月日付けが誤っている可能性が大きい。

一般的に言つて、『御日記』と「歌日記」のどちらかの年月日付けに誤りがあるとしたら、それは「歌日記」のほうである可能性が大きい。『御日記』が、『妙法院日次記』について、「多数の筆者が参加しているが、ある程度、時期を区切つて坊官により整理しなおされており、直接に記録した本人の自筆は少ないものと思われる」<sup>(12)</sup>と言われているのに近い成立過程を経ている<sup>(13)</sup>としたら、その年月日付けが誤っているとは普通には考えられない。

この場合も誤っているのはおそらく「歌日記」なのであつて、はやく正宗敦夫「桂園史料」<sup>(14)</sup>が、「歌日記」文化七年は実は文化八年の誤りであることを指摘している。ただ、その論の主眼は、「歌日記」では文化七年八月一日とされている「直好 幸文 弘章たち伴ひて」云々の記事が木下幸文の日記では文化六年になつていふことにもとづいて、文化八年が文化六年の誤りであること  
を明らかにすることにおかれ、文化七年については、

幸文日記は乱れて居らぬが景樹日記は年がいたく乱れて居る(例へば文化七年と云ひ伝へたのが文化八年の有り又文化四年の末に文政十年のが少し斗り付て居るなど)其故これも幸文日記に従ひて文化六年のと定めて先誤まりは無からう。

と、私に傍線を付したようにあるのみで、文化七年とされている部分のすべてが文化八年なのか、また誤りとする根拠は何なのか、明示されていない。

この正月十九日について言えば、『古今集』講義再開の記事の前に、次のような文化八年であることを推測させる記事がある。四行目の「さて題を分つ」と「父の君のみもとより」は、改行もな

く連続しているが内容は異なっている。おそらく「題を分つ」の次に、景樹の得た題と詠んだ歌とが脱落しているのである。また、「過し十六日」は、過ぎし月の十六日、あるいは過ぎし年の同月十六日の意ではないであろう。それでは贈歌と答歌との間が開きすぎる。「過し十六日」は「去る十六日」の意で、この記事が十七日から十八日に書かれたことを示している。

十六日。夕つかた、ちかき花園の君のみもとにまうのぼる。こは父の入道の君、こぞしはす二日にかくれさせ給ひ、そのみおもひにこもらせおはすほどなり。さて題を分つ。父の君のみもとより

人はみな花ともみれど白雪のふりにし身には春も覚えず  
かへしまゐらす

仙人の春ともしらぬ春にこそ花ともいはぬ花は咲くらめ

こは過し十六日に、陸奥介をとまけてかざりおろし黄中といふ名になり給ひし、そのわび心をのばへ給へるなれば、返しはいはひ奉りし意なり。

右の引用箇所のうち、「花園の君」の「父の入道の君」の逝去と、「父の君」の陸奥介辞任・落飾が年次推定の手がかりになる。「花園の君」は花園公燕、その父の「入道の君」は花園公章である。公章は文化四年二月十五日落飾し、法名三樂を得、文化七年十二月六日、四十四歳で薨去した<sup>(15)</sup>。命日に二日と六日の違いがあるが、どちらかの誤りか、実際と届出の相違であろう。いずれにせよ「こぞ」は文化七年、したがってこれは文化八年の日記ということになる。

次に、「父の君」は養父であった香川景柄である<sup>(16)</sup>。『地下家伝』によれば景柄は、寛政八年十二月十九日に従六位下、同日任陸奥介、文化八年五月十四日に介を辞し、同日落飾、文政四年十月三

日に享年七十七歳で没した<sup>(17)</sup>。このうち陸奥介辞任・落飾の「五月十四日」はおそらく一月十四日の誤りである。「井上通泰氏見聞記の抄」と副題にある「桂園叢話第十三」<sup>(18)</sup>は、「文化八年正月十四日官を辞し落飾して名を黄中と改む」とする。「萩坪大人」から送られた「徳大寺家の記録の書拔」に依拠した旨の注記がある。これに拠るべきであろう。「歌日記」は正月十六日とするが、これは黄中の歌が届いた日だったと推測される。つまり黄中の陸奥介辞任・落飾は文化八年正月十四日であり、「歌日記」のこの部分は文化八年の日記だったということになる。

現在見られる「歌日記」文化八年は、前半の自筆部分と後半の非自筆部分とに分かれており、自筆部分は実は文化六年の日記、非自筆部分は文化八年の日記とおぼしい<sup>(19)</sup>。そして自筆部分の開始は八月一日であり、非自筆部分は「一月楼にて雪の降りたる朝珍しくふれる河原の初雪をいつもさらせる布かとぞ見し」と冬からはじまって十二月まで続き、最後は題詠「秋人事」で終わっている。つまり現在知られるかぎりでは文化八年正月の記事はない。しかし、この文化七年正月十六日と十七日あるいは十八日は、実はその知られていなかった文化八年正月の日記の一部分であった。そしてもしこの推測があたっているなら、それに続く、文化七年であることの極めて疑わしい十九日も、実は文化八年正月十九日の記事だったと推測される。

そしてさらに言えば、二十一日の次のような記事も、『御日記』とつき合わせると、文化八年の日記であったと考えられる。

廿一日。仏光寺のみとのにいつも十日のころまうのぼり、さてはじめての御つどひもよほさるに、又ことしはおのれむねふたぐやまひありて、さる御殿わたりの遠きにはえものし侍らねば、さることも行はせ給はでやみにしを、あかずおぼして、けふしもかしこくもお

のが庵近き木村某がやどに入給ひてよびよせ給ひ、い  
さゝかその式めきて皆にも歌よませ給ひしなり。御兼

題

鶯声和琴

(二行空白)

百ちどりさへづる春の初ごゑをなが来て鳴も珍らしき哉

すみれ つくぐし なづな

都人早くなづさへからなづなみになるまでに春は成にき

すゞめのおや、ひなにえくはせんとするかた

汝が声を今も聞しる人あらばいかにかなしき心なるらん

ところ

長閑なるいづくはあれどこの殿に所えたりとみゆる春哉

これと対応しているはずの『御日記』文化七年正月二十一日は  
次のようになってゐる。全文を引く。

一、御出仕。

一、川守西光寺 三之間縫目四段紋白五条。

新発意円澄

一、大宮三位殿御成。 取次貞之進

年始御祝詞被仰候事。

一、千種殿御使山田右衛門 入魂軍蔵

先達而者御目六之通被進忝御挨拶。

ここに随応上人外出のことは見えない。いっぽう『御日記』文化  
八年正月二十一日には、つぎのような外出の記事がある。

一、御所様 青蓮院宮様より東山御廟所へ

御成被為在候。御供大蔵卿。

先より木村貞之進江御成。

月日が一致し、上人の行く先も、「歌日記」は「木村某」、「御日記」  
は「木村貞之進」と苗字が一致している。「歌日記」の文化七年正  
月二十一日は、おそらく文化八年正月二十一日の誤りである。そ  
うであるなら、十九日が文化八年正月十九日であった可能性は一  
層大きい(20)。「歌日記」によって従来文化七年正月十九日とされ  
てきた景樹の『古今集』講義の再開(21)は、実はそれより一年遅い  
文化八年正月十九日だったといつてよいであろう。

【九】

『御日記』文化八年(一八一二)八月十八日

一、御門跡様御成。 木屋町香川出養生之

処へ。

『歌日記』

なし

\* 「歌日記」文化八年は、前記のように八月一日から八月二十一  
日までの景樹自筆部分と、「二月楼にて雪の降りたる日」以下の非  
自筆部分からなる。八月十八日は自筆部分の範囲であるが、この  
部分は正しくは文化六年の日記である。つまり文化八年八月十八  
日は、「歌日記」自体が未発見のままである。かりに文化六年の日  
記という推定は誤りであつて文化八年が正しいとしても、十八日  
は十九日とともに記事を欠いている。また、この前後にも、これ  
と対応する記事はない。

【一〇】

『御日記』文化九年八月十一日

一、御所様 今日岡崎本光寺へ御成。

先より木村貞之進へ御成之由。

朝四ツ時半時

還御。

「歌日記」文化九年八月十一日

八月十一日。仏御門主、木村がもとに入らせたまひて御当座

社頭祝

糺川<sup>絶</sup>尽じとぞおもふ君が代にふたゝびかへす山あひの袖

耕夫画 女郎花と薄と交りたてるかた

女郎花すゝきを花の袂にてかへすくもたれをこふらん

野べに出たまひけるに御供して

くもりたる月の光も晴にけりいざや野寺のかど叩きてん

\*「本光寺」は『御日記』『歌日記』にしばしば見える寺である。

第二節に各一例を引用した。そのうちの「歌日記」の方の記事に「近き本光寺」とあるのによれば、岡崎の景樹宅の近くにあったらしい。

古地図を見ると、天保二年七月刻成、慶応四年二月再刻『改正京御絵図細見大成』(2)に「本光寺」が載っている。加茂川の東、二条通りの東の突き当たりで、秋田屋敷・加州屋敷の東、満願寺の南方向にあたる。同じ地図の天保二年版の同じ位置に「本光院」として載っているのも、おそらくこの寺である。現在は二条通がその跡地を横断して白川に至り、二分された旧境内の南半分ほどが京都市動物園の敷地の一部になっている。この寺がこの位置に

あった時期は明らかではないが、明治九年版權免許、福富正水校正『京都区分一覽之図』(23)ではこの位置に建造物はなく、田畑が草地を思わせる符号が記されている。文化年間の地図については未調査であるが、仏光寺東山本廟とも近く、『御日記』『歌日記』の本光寺はこの寺であったと考えられる。

「木村貞之進」は近習の一人として『御日記』に頻出する。【八】に引用した文化七年正月二十一日、文化八年正月二十一日にも出ている。近習は「宗主の側近にて世話する役」(『佛光寺辞典』)で、親類の公家・大名との年賀慶弔の挨拶の使者・取次、門主やその家族の外出の供なども務めた。「歌日記」に「木村貞之進」「貞之進」は見えないが、随応上人が「木村高敦の家」(文化四年七月二〇日)、「木村某がやど」(文化七年正月二十一日)に入り、景樹も加わって歌会が開かれたという記事が出てくる。この高敦は貞之進その人か、またはその一族であった可能性が大きい。

「歌日記」の「耕夫」は上田耕夫である。生年未詳、天保十三年没。応挙門。『御日記』によれば仏光寺と最も密接な関係を有する絵師の一人である。この時も、木村貞之進宅に呼ばれた可能性もあるが、有り合わせた耕夫の絵に賛を加えただけなのかもしれない。

【一一】

『御日記』文化十二年(一八一五)三月十九日

一、香川長門介参 殿<sup>ニ</sup>而奥向へ通ル。

『歌日記』

なし



\*「歌日記」文化四年七月二十日に、「昨日仏光のみとのにまうのぼるべきを、いささか暑けのなやみにさはりてえまゐり侍らざりしをあかぬことに思しめして」とある。参殿すべき日は十九日だったわけで、それと同じ十九日である点が注目される。毎月十九日に仏光寺奥において歌会が催されていた可能性を感じさせるからである。

しかし、現時点では、十九日の一致は偶然だったと言わざるを得ない。いったい景樹が仏光寺における歌会にどの程度出席したか、というより出席できたのか、明かではない。新年最初の初会に招かれたことは『御日記』『歌日記』の両方に見えるが、それ以後の月次会について仏光寺に参上したという記事はない。また、「歌日記」において、初会以外に仏光寺に参殿して当座の歌を詠んだという記事は、文化三年十月三十日の一例しか見出せない。それも、まず、

仏光寺へまうのぼる。御兼題未進よみて奉る。

として、「漸待郭公」以下、夏と秋の題六題、歌は一首欠けて五首を列記し、続いて、

今日御当座題 深夜落葉 伎女対鏡

として歌各一首が記されるのみである。月次会への出席であったのか否か、判然としない。【八】に引用した文化七年（実は八年か）正月二十一日に、「仏光寺のみとのにいつも十日のころまうのぼり」とあるのも、「さてはじめての御つどひもよほさるに」と続くことから明白なように、初会についてのみのことである。おそらく景樹は、初会以外の仏光寺会については、割り当てられた題を通知されて詠み、それを献上しただけではないかと思われる。ちなみ

に、仏光寺において月次会が催されていたことは、右の「御兼題未進よみて奉る」につづいて春・秋の六題が列記されていることから推測されるし、より確実には、同じく「歌日記」の文化十年に、「仏御殿月次御題二月より」として、「江上春曙」から「除夜仏名」まで十二の題と歌とが列記されていることから分かる。

【一二】

『御日記』文化十三年（一八一六）正月十九日〔写真2〕

一、御所様

御先番兼

青蓮院宮様江御成 治部〔のしめ 半上下〕

御先方御出迎

坊官不勤仕之由

並河掃部御断。掃部御出迎

御供 此母

左内〔初□祝伴□間計出ス〕

直様

東山御廟参

御徒士 三人 御網代御輿 御沓 御長柄

四人 御草り取

合羽籠 押

三人 押

先より安住台へ御成

八ツ半より君様安住台へ御成 御供 兵部

一馬

正親

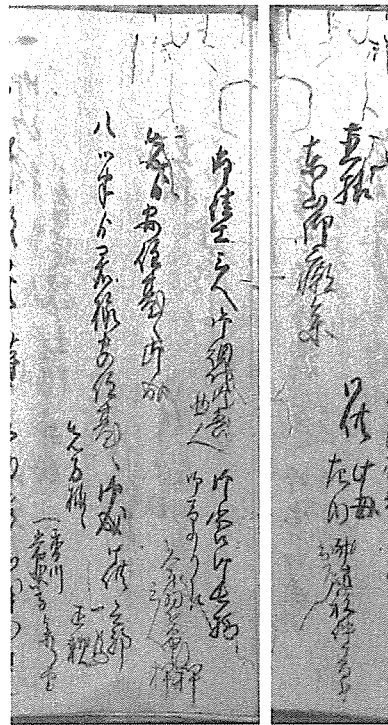
先方様へ

香川

常楽寺

参り候由

〔写真2〕「御供 此母」から「香川 常樂寺 参り候由」まで。



なし

『歌日記』

\* 「治部」は仏光寺家司の辻治部、「並河掃部」は未詳であるが、『地下家伝』に載る青蓮院待法師なみかわ河靖栄かもしれない。「此母」以下の御供は近習である。「君様」は千恵君、後の仏光寺二十四代随念上人ある。文化二年生、弘化二年、四十一歳で遷化した。父は仏光寺二十三代随念上人、母はその室で伊勢安濃津藤堂高疑の長女聞名信院である。「安住台」は第三節でふれた。「常樂寺」は仏光寺御堂衆の恵岳である。和歌を好み、蒿蹊・景樹などの歌人たちと親しかった。

【一三】  
『御日記』文化十三年（一八一六）三月二十日

一、岡崎香川長門介宅へ〔兵部 雅楽〕参ル。右者明日御成ニ付乍遠方彼寺江可致推参様々之儀ニ付而也。

『歌日記』

なし

\* 「兵部」は家司の小幡兵部、「雅楽」は近習の宇野雅楽である。「明日御成」は随念上人の法蔵寺への御成で、『御日記』の同じ三月二十日に次のようにあるのを受けて言う。

- 一、大坂講中内錫屋庄兵衛・錫屋治郎兵衛上京ニ而御所様久々御省略中ニ付御鬱情も可被為在、右
- 二付我山辺ニ而も御成御招待申上度旨ニ付上京。尤
- 輪番同道右之趣言上。然ル処、御時節柄此節
- 峨山杯と申事者世間如何敷被思召旨、輪番江
- 相達。右ニ付御室辺和泉谷法蔵寺と申
- 寺、甚眺望杯宜敷旨ニ付、是江御成之儀願、即
- 刻御治定、則明日被仰出。

「輪番」は大坂御堂（大坂別院）の輪番であろう。別院の住職は門主の兼務であるため、かわって輪番が置かれる（『佛光寺辞典』）。「峨山」は未詳。嵯峨山か。「法蔵寺」は、現右京区鳴滝泉谷町、西寿寺の南、泉谷にある黄檗宗の寺である。

【一四】  
『御日記』文化十三年（一八一六）三月二十一日〔写真3〕

一、法藏寺へ御成。御出門巳半刻 御供廻如左

御徒士 三人 御輿 四人

御輿脇 佐々木正親 山田貢

森下左内 関口右馬之介

御草履 七人 御箱 七人

君様 御輿 四人

御輿脇 三人 大東丹下 小幡富二郎

宇野雅楽

草履 七人 御箱 七人

御茶弁当 七人 合羽籠 五人

御膳番 安川泰一郎

御先番兼帯 北村此面

井上主膳

御供

小幡兵部 若党七人 女中供七人

草り七人 但馬 龜田 みを

長持 二荷 人足 四人

但先へ行

還御寅ノ刻

一、御所様・君様江種々彼寺ニ而御馳走。画工東在敬

と申者参ル。於御側席書。香川長門介讚。在敬

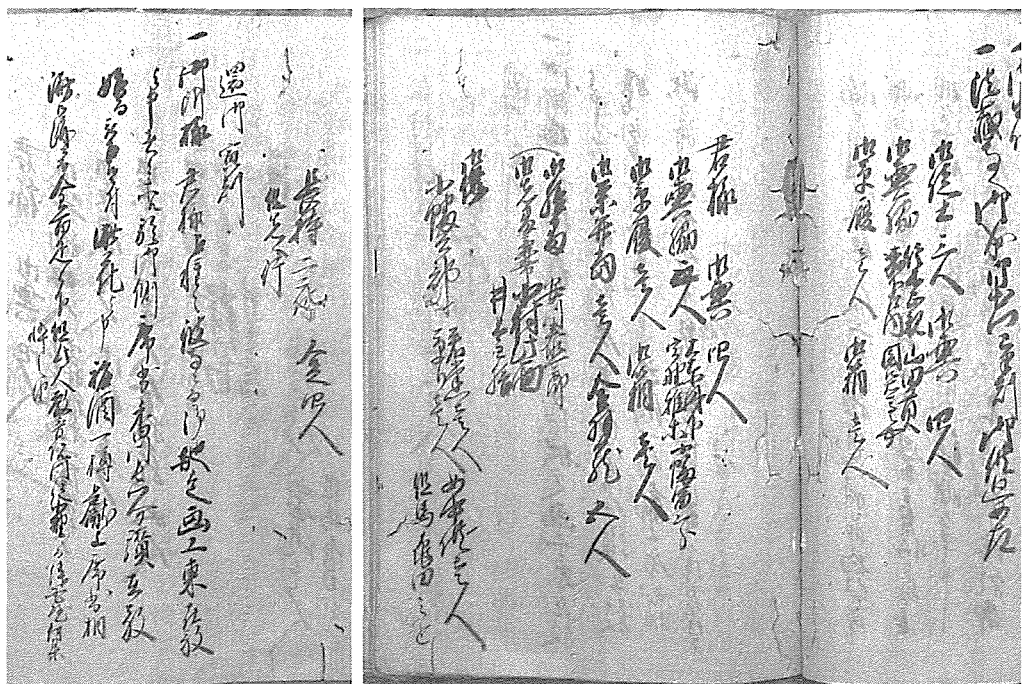
始而被召候ニ付、此花と申口酒一樽献上。席書相

濟候跡ニ而金百疋被下。但此人教音院門徒北野ニ而津国屋何某

悴之由

[写真3]

「歌日記」



なし

\*「東在敬」は、澁谷曉眞門主によれば、原派の絵師原在敬で、仏光寺に在敬画紙本豎幅の松鶴の図が現存する。□は「福」か。

この遊山は一見極めて盛大であるが、供の人数や格からすれば、随応上人・千重君二人一緒の遊山としては平均的なものなのではないかと思う。おそらく廟参、遊山など種々の外出にそれぞれ定まった格式があつて、ここでもその格式に従っているであろう。それにもかかわらず盛大に見えるのは、記述が例外的に詳しいせいである。そして記述が詳しいのは、これが講中の勧めにより実現した、いわば法中・門下公認の遊山であつたことによるところであろう。ちなみに言えば、その公認の遊山で行われたのが「席書」であつたことは、次の【一五】ともかかわって注目される。

【一五】

『御日記』文化十三年（一八一六）閏八月二十六日

一、今巳刻御出門<sup>三</sup>而清水山江御成。延命院御休所。

尤御忍。君様御違例<sup>三</sup>付御成なし。

御供 稲田大藏卿 小幡兵部

木村貞之進 後北村此面

前 三谷監物 清水将曹

辻 一馬 小幡富三郎

関口右馬之助

香川長門介 岡山主水

岡山辰二郎参ル

於山頭<sup>三</sup>席書。香川宗匠夫々讚在。

法中・御門下左之通。

越後新潟 泉州堺

願隨寺 光林寺

江州磯村 棋州天王寺

喜光寺 光円寺

京 越前府中

常楽寺 光善寺

新発意

草津

山内孫左衛門

林寺

村田伝兵衛

新庄

河村吉蔵

石山<sup>三</sup>おゐて 御側江被召御酒被下。一統

席書拜見。

正行院殿・鶴丸殿御誘引。

山上<sup>三</sup>而種々御馳走献上。黄昏延命院へ

御成。其より御膳且御膳後又席書。

其後、法中・御門下一統江 召於

御前、席書二枚ツ、被下。暫有<sup>而</sup>還御。子刻過。

「歌日記」文化十三年閏八月二十六日

後八月廿六日。仏光寺の君茸狩にとて清水山に入らせられける日、彼山にて画賛。

月に千鳥二つあるかた

照月に鳴くや千鳥の一つがひなるゝとすれど寒き夜半哉

茶黄袋

けふといへど楽しかりけり憂事をさけてものぼる山路ならねば

色付たる稲

豊年のとよあしはらの秋風のなびく瑞穂の国のゆたけさ

椿に柳

あひに逢ひて玉の緒柳玉つばき光りかはせるけふの楽しさ

紅葉の枝にめじろ

寂しさよ友をはなれぬめじろだに独来て鳴く秋の夕ぐれ

萩一本

大かたはうつろひはてし秋萩のさかりを残す一本ぞこれ

紅梅

青柳のみどり桜のしろたへもおもはぬうめの濃染なりけり

山家に橋あるかた

まれにだにとふ人もなき此の庵の前の掛橋苔むしにけり

しめじ

誰かしめし山におひ出で世の中にことくしくも名には立つらん

松に蔦はいたる夕のかた

山の端に夕日のかげはかくろひて残る誠の秋の夕ぐれ

黄菊

世の中の露にうつりて咲匂ふ菊も黄葉のいろにならひぬ

亀二つ遊ぶ

親亀にしたがふ子亀万代の道をかねても習ひけるかな

權

世の中に今とりはやす色々のすがたもあれどもとの權

仏光寺の御殿にて 薄秋風に靡きたる所

花すゝきふきしく風に打なびきあまねく人を招きける哉

時雨の紅葉にまじれり

むら時雨をのが染たる色なれどあまり心にまかせける哉

鮎二つ水にうかぶ

ひさかたの月の中なる桂鮎いづくまでとか猶のぼるみむ

紫ふぢ

陰高き松にはよらぬむらさきのうへなく見ゆる藤浪の花

若まつ

若松のほつゑ斗ぞ見えにけるいかにをしめる千年成らん

桜にうぐひす

心なく踏しだく哉うぐひすの花のえだとも思はざるらむ

玉

皆人のこゝろの外に求めけりおのがつゝめるたまの光を

孔雀の羽に珊瑚樹

誠をば玉とみがゝん一羽をば挙るにたへぬ力なれども

月前擣衣。薄あり

衣うつ袖にたぐひて靡く哉月の前なるしのゝ小すゝき

川蟬に撫子 以上

そに鳥のみどりもそひて行く水の汀になびく河原撫子

清水山にて

鳥辺やまかなしかるべき所にて楽しくけふを暮しける哉

\*「歌日記」の「仏光寺の御殿にて 薄秋風に靡きたる所」以下の画讃と「清水山にて」の一首は、この時の詠ではないかもしれないが、念のため掲出した。「御日記」の「円山主水」は応瑞である。「円山辰二郎」はその男応震と思われるが未詳である。

『御日記』を見ると、これが違例の遊山であったことがわかる。御供の稲田大藏卿、小幡兵部は第二節に掲げた『御日記』文化九年五月二十三日にも出ている。稲田大藏卿は仏光寺坊官で、仏光寺家中の最上席を占めている。小幡兵部は家司で、同じく俗の側における序列は、稲田大藏卿、ここには名前の出ない辻治部について上から三番目である。この二人が供につき、加えて応専連枝・鶴丸父子が呼ばれている。「君様御違例二付御成なし」というの

も、本来なら「君様」すなわち千重君も参加のはずのところ、といった意味であろう。さらに加えて、願隨寺以下の法中・門下も同伴している。この盛大な自体違例であるが、これほどの盛大さにもかかわらず、隨応上人は「御忍」とされている点になにやら普通ではない雰圍氣を感じざるを得ない。

この遊山は、『御日記』文化十三年閏八月二十五日に、

一、常樂寺參 殿三而、明日今度上京之法中

並御門下共、清水山辺江御成願度旨申出、  
則 御許容。

とあるのによれば、前日の常樂寺惠岳の申し出、または惠岳を通じての法中・門下の申し出により急遽決定した。しかし、それほど短時間に準備できたとはどうも思えない。

これは、懸案であった「借財濟方」が、この前々日の二十四日に「借財濟方請書」が出されて解決したことを受け、それにかかわって奔走した法中・門下、あるいは借財濟方を引き受けることになった法中・門下を慰労するための遊山であった。事実、「法中・門下左之通」として列記されている人々のうち、遊山の提案者である惠岳とまだ若年であろう光善寺新發意のほかは、その請書に署名のある人々である。これほど盛大でありながら隨応上人は御忍び、というのも、おそらくこうした遊山の趣旨にかかわって、本山の公式行事ではないことを表明しようとしてのことであろう。

景樹にかかわって注目されるのは、この遊山が、円山主水・辰二郎と景樹との「席書」を中心に構成されていることである。違例と言えば最大の違例がこの点であろう。同伴の門下の一人である草津の山内孫左衛門の同族山内半助は、請書にも署名している人物であるが、母を亡くしたため一時上京を差し控えた孫左衛門を残して先に上京し、隨応上人に面会して『御日記』文化十三年

八月二日)、借財濟方のため働いた。ところがこの遊山には参加していない。問題解決後早々に帰郷したのではないかと推測される。その半助に渡すべく、次のように画讃二枚が孫左衛門に託された。

一、山内孫左衛門、御朝時後被 召於白書院二

御対面。清水山之御挨拶厚被為在。然而

其節之画讃二枚、半助へ被下候旨。

(『御日記』文化十三年九月四日)

これも席書が遊山の中心であったことを示す事実であろう。

『御日記』の筆者たちに、景樹はかなり冷遇されていると言わざるを得ない。和歌は隨応上人個人の好ましからざる癖と見なされていたと思しく、年に一度の初会以外に景樹と会うためには、本廟廟參や青蓮院宮への挨拶のついでという形をとるなど、隨応上人の苦勞は相当なものであった形跡がある。にもかかわらず、なぜここではその景樹のかかわる「席書」が中心とされているのか。この問題は今後の課題としたいが、【一四】の法中・門下公認の遊山においてもやはり席書が催されていることは、この問題とかわって重要な事実なのではないかと思う。もう一つ、この問題と密接に関連すると思われるのは、「歌日記」によれば景樹は仏光寺のためにおびただしい数の画に讃をしている、ということである。例をあげると、文化四年四月十八日二十三首、文化九年月日未詳には十六首、文政元年月日未詳には三十三首、隨応上人示寂後も、文政十年正月十一日に十一首のごとくである。これらは隨応上人あるいは隨念上人の手許に留められたのではなく、しかるべき折りに法中・門下へ下賜されたのではないかと想像される。

(付記)

『御日記』をはじめとする本山仏光寺所藏資料の閲覧につき、澁谷曉眞

門主と御家族に格別のご配慮を頂いた。ここに記して深謝申しあげる。なお、本稿は平成十六年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)による研究成果の一部である。

注(1) 各年の伝存の状況は次の如くである。

- 文化 七年(二八一〇) 元日〜大晦日 一冊  
八年(二八一〇) 元日〜大晦日 一冊  
九年(二八一〇) 元日〜八月二十九日 三冊(下書き)  
十二年(二八一五) 元日〜大晦日 二冊  
十三年(二八一六) 元日〜十二月二十七日 一冊  
十四年(二八一七) 元日〜七月二十八日 一冊
- (2) 彌富濱雄編『桂園遺稿』上巻・下巻(五車楼 明治四十年三月・同八月)。
- (3) 『鳥取大学教育地域科学部紀要』第五巻第一号 平成一五年五月。以下「前稿」と略記する。
- (4) 文化五年正月十八日(常楽寺菊岡会始)、文化十年九月十九日(隨応上人御成による当座)など。
- (5) 第四節の【一一】で述べるように、景樹が仏光寺において催される歌会に出席していたのは初会のみであって、それ以降の月次会には呼ばれていなかったのではないかと思われる。
- (6) 澁谷有教編『佛光寺辞典』(本山佛光寺 昭和五九年三月)
- (7) 拙稿「香川景樹『歌日記』の「年づけ」」(『鳥取大学教育学部研究報告(人文・社会科学)』第四十七巻第二号 平成八年一二月)
- (8) 仏光寺『御日記』、澁谷有教編『佛光寺辞典』など。
- (9) 前稿第五節「仏光寺と景樹 その三」参照。
- (10) 前稿第三節から第五節までにとりあげた。
- (11) □はいったん「末」を記し、それを○でくくっている。抹消しようとした形跡もあり、○の意図するところは不明である。
- (12) 村山修一「妙法院日次記」(『日本歴史「古記録」総覧』 新人物

往来社 平成二年一月)。

- (13) 前稿第二節「仏光寺『御日記』について」参照。
- (14) 正宗敦夫「桂園史料」(『萬年艸』巻第六 明治三六年六月)
- (15) 坂本武雄編・坂本清和補訂『改訂増補 公卿辞典』(国書刊行会 昭和四十九年一月)による。
- (16) 景樹が離縁後も景柄を「父」と呼んでいたことは、拙稿「香川景樹『歌日記』の因幡と因幡人」(『鳥取大学教育地域科学部紀要(教育人文科学)』第四巻第三号 平成一五年三月)。
- (17) 正宗敦夫編『地下家伝』(自由新報社 昭和四三年一二月)による。
- (18) 『しがらみ草紙』第三十一号(新声社 明治二五年四月)。『近代文芸雑誌複製叢書』第二十次 臨川書店 平成七年七月)による。
- (19) 拙稿「香川景樹『歌日記』の「年づけ」」(注7)。
- (20) 「歌日記」文化七年正月のそのほかの部分、日にちの明記されている場合のみそれを列記するなら、九日、十二日、十四日、十五日、二十日も、文化八年正月である可能性があるが、これらについては現時点では考察のための手がかりがない。
- (21) 山本嘉将『香川景樹論』(育英書院 昭和一七年一二月)、黒岩一郎『香川景樹の研究』(文教書院 昭和三二年一〇月)、兼清正徳『香川景樹』(吉川弘文館 人物叢書 昭和四八年八月)、竹岡正夫編『古今和歌集正義講稿』(勉誠社 昭和五九年九月)など。
- (22) 野間光辰編『新修京都叢書 第二十三巻 古地図集』(臨川書店 昭和五一年六月)。
- (23) 注(22)に同じ。

『地域楽論集』第一巻第一号 平成一六年一二月)

# 仏光寺『御日記』の香川景樹

——文政元年から五年まで——

## 一 はじめに

真宗仏光寺派本山仏光寺の『御日記』から、香川景樹にかかわる記事を抄出して、景樹の「歌日記」<sup>(1)</sup>と比較対照する。今回取り上げるのは、次の拙稿二編<sup>(2)</sup>に続き文政元年（一八一八）から同五年（一八二二）までの五年分<sup>(3)</sup>である。

〔1〕仏光寺『御日記』の香川景樹——文化六年まで——（『鳥取大学教育地域科学部紀要』第五巻第一号 平成一五年五月）

〔2〕仏光寺『御日記』の香川景樹——文化七年から九年まで、文化十二年から十四年まで——（『地域学論集』（鳥取大学地域学部紀要）第一巻第一号 平成一六年一月）

文政五年は景樹と親しかった第二十三世門主随応上人遷の化の前年である。この間の五年のうち、文政元年と五年の『御日記』に景樹の名は見えない。たしかに元年はそのうち約九ヶ月間、景樹は京都にいなかった。江戸に自己の歌論・歌風を弘めるべく二月十四日に岡崎を発ち、三月十日江戸目白台の児山紀成宅着、目的を果たせないまま十月二十三日そこを發つて、十二月十五日に帰京した<sup>(4)</sup>のであるが、しかしこの九ヶ月の間、仏光寺と景樹とのかかわりがなかったわけではけっしてない。

たとえば、往路の日記である『東路の記』に、岡崎出立の際の見送りの人々として名のあがっている二人の僧侶、光福寺宗達と常楽寺恵岳とともに真宗仏光寺派の僧である。また、寄留先であ

る児山紀成も仏光寺と関係の深い人物で、その一端については前稿〔1〕に記した。さらに一例をあげるなら、次のように『東路の記』二月十五日から十六日にかけて登場する草津の山内春素、頼喜、紀伊子、知義は、草津の有力門徒である山内孫左衛門の同族ではないかと思われる。頼喜は孫左衛門その人かもしれない。山内氏は『御日記』にしばしば見え、前稿〔2〕の【一五】にもその一部分を引用した。

田中 仁

草津のさと山内春素がもとにやどる。よくあるじゝたり。父頼喜の五十賀の歌をこふ。こはをとつとしねがひたりしを、今までおこたりたまへりしなり。大人、此かどにながれてしづ河のしづかにへなん千世をこそおもへ

妻なる紀伊子も今年おなじ賀なれば、大人、  
浅みどり春の草津の里なれていくよ迄とか若がへるらん  
十六日あした、あるじ方よりよみて出せる歌

春素  
うき物と名にこそたてれ花故の草の枕はのどけからまし  
知義  
東なる桜みむとて君ゆかばみやこの花ぞうらむべらなる

紀伊子  
隅田河すだのわたりの花よりも君が言葉の色やまさらん  
春素 知義は石部までおくり、意誠 帰厚はこゝにて



わかれたり。

このように、景樹の江戸下向にも仏光寺はさまざまな形でかわっているらしいのであるが、「歌日記」を見るかぎり本山仏光寺や随応上人は直接には登場しないし、『御日記』に景樹は出てこない。

もう一箇年、文政五年も『御日記』に景樹の名は見えない。しかし、実はこの文政五年には、景樹にとって随応上人とかかわって重要な出来事があった。「歌日記」十二月二十七日に次のようにある、随応上人への『新学異見』の講義と竟宴である。この件について、ここに記しておきたい。

仏光寺御殿にて

かしこくも我『新学異見』をとき聞え奉りし竟宴玉はりし今宵しもいとはやく更ぬる心地し侍りければよみて奉りける。ときはしはす廿日まりむゆか春立けるあくる日也けり。

暮て行としの内なる春の夜はいとゞも夢の心地こそすれ

感慨あらわな筆致から、この講義と竟宴が景樹にとってかくべつに重い意味を持っていたらしいことが推察できる。

しかし、それは『御日記』がこの件を書き留めるかどうかとは、また別の問題である。もしも書き留められているとしたら、少なくとも竟宴の日が十二月二十六日と二十七日のどちらだったかは判明する。「歌日記」十二月二十七日と先には記したが、それは「春立ける」日を、『日本暦日原典』、『増補 日本暦日便覧』<sup>(5)</sup>にしたがって二十六日として、詞書の「ときはしはす廿日まりむゆか春立けるあくる日」を、「時は、十二月二十六日に立春をむかえた、その翌る日」ととったからであって、この詞書を、「時は十二月二

十六日。すなわち立春の翌る日」と解釈することも、語調のうえでは十分に可能なのである。もしも『御日記』に講義・竟宴の記載があればこの問題も解決する。そしてもしも記述がさらに詳しく、講義の日数や仏光寺法中・家中の講義への陪席の有無、「宴」に列席した人物の名が判明したなら、それらは景樹と仏光寺、仏光寺派との関係を考えるうえで重要な手がかりになるはずである。万が一書き留められていなかったとしても、それはそれで、『御日記』の筆録者にとって景樹や『新学異見』、また門主が景樹に『新学異見』の講義を受けたことは、その程度の価値しか有していなかったということを示す重要な事実である。

しかし、文政五年の『御日記』は十二月を欠いている。注(3)に示したように、この年の『御日記』は二分冊になっており、第一冊は正月朔日から八月二十四日まで、第二冊は八月二十五日からはじまり大晦日の記事で結ばれている。一見したところでは壱年分がそなわっているようにみえるが、その第二冊は、十月十一日までは連続しているものの、続く十二日から十二月二十九日までの約一ヶ月半がなぜか欠けているのである。『御日記』にはなくとも、仏光寺にとって特に重要な行事や儀式、出来事について、別に詳しく記録される場合もあって、たとえば本稿に関連する出来事としては、【二二】の随念上人の得度について「別記二委細有之候也」とある。しかし、そのように『御日記』とは別に記録があるのは、知られるかぎりでは本山か門主一族にかかわる重要事の場合であって、『新学異見』の講義・竟宴といった、いわば門主個人の趣味については、そうした記録もおそらくないであろう。現在知られる資料によるかぎりでは、この『新学異見』一件については、「歌日記」の記述以上に詳しいことはわからない。ちなみに、「歌日記」の『新学異見』講義・竟宴の直前には、次のような仏光寺参殿、詠歌の記事が置かれている。

早梅 仏光寺御殿にて

うめの花君にまたれて鶯のこゑより先にほころびにけり

歳暮忙 同

百敷の大宮人もいとまなきとしのをはりに成にけるかな

これが竟宴と同日のことであつたかどうか、不明である。「早梅」という題は、立春の前後どちらにも詠まれるから、十二月二十六日より前のことであつた可能性もある。いずれにせよこの『新学異見』の講義・竟宴にかかわる記事は『御日記』にはない。

## 二 仏光寺『御日記』の香川景樹

仏光寺『御日記』文政元年から文政五年までの香川景樹関係記事を抄出し年月日順に並べる。【一】で括って示す番号は、前稿【1】【2】からの通し番号である。抄出の基準は前稿【2】に記した。「歌日記」に対応する記事がある場合は、それを併せて掲げ、無い場合は「なし」とする。文字の大小、配置は印刷の便宜に従い、必ずしも原本のままではない。『御日記』の□は判読できない文字である。同じく『御日記』の、割り注など一行分に二行以上書かれている部分は「」で括って示す。両日記からの引用の後ろに、記事の内容等につき必要に応じて\*を付して説明を加える。

【一六】

『御日記』文政二年（一八一九）正月十日

一、御会初<sup>ニ</sup>付香川長門介奥向へ参上。

「歌日記」文政二年正月。日未詳。

雪消春水来 仏光寺の御兼題

鳴滝の岩こす波は峰の雪うちとけたりとつぐるなりけり  
おとは川山はみどりになるまゝに雪げに濁る水の色かな

寄道祝 おなじ御当座

通ひこぬ他の国こそなかりけれ開けし御世の道求めつゝ  
草も木もなびく陰より君が世の誠の道はあらはれにけり

\*仏光寺の歌会始の記事は、前稿【1】の【一】には、

一、御歌初<sup>ニ</sup>付香川長門介参。於書院御のし昆布被下。鏝之間<sup>ニ</sup>御祝酒。夫より奥へ参。

とあり、【四】には、

一、御歌初<sup>ニ</sup>付香川長門介参上。御側<sup>ニ</sup>御酒被下。

とある。「のし昆布被下」の有無、酒の場の「鏝之間」と「御側」の違いは、式次第あるいは景樹の待遇の変化、つまり実態の変化にともなうものなのか、または「御祝酒」と「祝酒」の意味の違いや書き様の違いによるところなのかわからない。このことは【四】に述べた。この【一六】では、単に「奥向へ参上」とのみあつて、のし昆布や酒にふれないのは、それが無かつたからなのか、あつたけれど書かれなかつたのか、不明である。

「歌日記」では未詳であつた文政二年の仏光寺歌会始の月日が、『御日記』によつて一月十日と判明するのであるが、では「歌日記」はこれを時間順に正しく配列しているのであろうか。

「歌日記」のこの記事の前に、日にちが明記されているのは、「四日。南禅寺の雪見に」である。歌三首が書きとどめられている。次に「子日若菜」「雨中子日」各二首と日にちが記されない歌がつ

づき、その次にこの仏光寺初会の歌四首が置かれている。いっぽう後ろは、「夏の柳の面に」一首、「毎年愛梅 菟会の兼題」一首、「十五日の夜」二首となっている。文政二年最初の子の日は正月七日<sup>(6)</sup>である。「子日」の歌は必ず子日に詠むわけではないにしても目安にはなる。このあたり、日付順に配列されているようである。なお、「歌日記」において、このように所々に日付を入れて時間順に歌をならべている場合、日付がないのは前の歌と同じ日の歌であることを意味する、というのが原則である。この場合、その原則に反するのは、「子日」、「仏光寺（初会）」がそれだけで日を暗示しているからではないかと思う。

【一七】

『御日記』文政二年正月十九日

一、青蓮院宮様へ御成

御徒士<sup>麻上下</sup> 三人 御輿 四人<sup>のしめ麻上下</sup> 御輿脇式人

〔嘉継 司馬〕 御箱 御草り取 御茶弁当

合羽籠 押 式人

御先番

兵部〔若党式人 草り取老人〕

御出門午刻。夫より御廟参。其後、岡崎香川長門介

□中之内、聖護院村ニ眺望よろしき処有之候ニ付御成。

継上下

若御所様御廟参。 御徒士 式人

御包

御輿 三人

御輿脇 式人

丹下

小供兩人 千太郎  
丹治郎

御草り取 老人

御箱 老人

合羽籠 老人

押 老人

御出門午刻半。

夫より

還御掛ヶ同所へ御成。

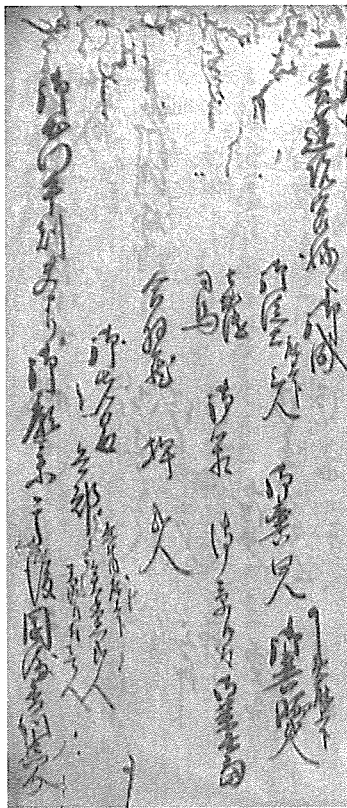
岡崎へ御先番 左京

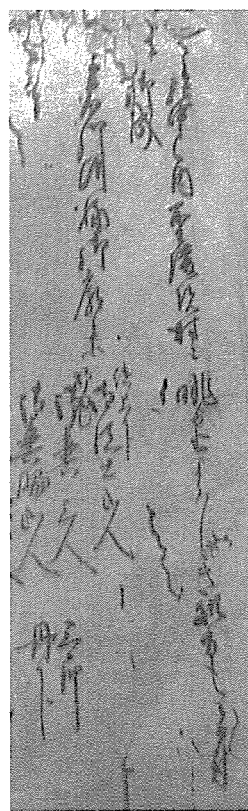
東山御先番 勘解由

「歌日記」

なし

\*左に冒頭から「三郎 丹下」までの写真掲げる。「□」は「浴」のようにも見えるが判読できない。「若御所様」は千重君、後の第二十四世門主随念上人である。「御廟参」は東山御廟所への参詣、「還御掛ヶ同所へ御成」は、御廟所からの帰途、岡崎の香川景樹宅へ御成、の意である。





【一八】

『御日記』文政二年四月朔日

一、聞名信院様御一周忌御法事。今御待夜より御影堂ニ  
おゐて御執行。御待夜御出仕。

同四月二日

一、聞名信院様御詞堂経開闢。尤明年よりも今日御執行  
被為在候。右開闢御齋、法中一統・御次中惣一統惣菜。  
但し惣菜者当年計ニ相限候事。

同四月三日

一、御法事御満座ニ付御廟参。  
兩御所様 御供廻り御忍口也。 各継上下。 東山ニ而麻上下  
着用。御先番 貞之進。 御輿脇〔左内 司馬 丹下 鞞負〕  
御徒士式人也。

「歌日記」文政二年月日未詳

薄暮卯花 仏御殿御裏御一周忌  
御園生のたそがれ時の卯の花を君が袖とも思ひける哉

\*「聞名信院」は随応上人室の禱子で、『佛光寺年表』『佛光寺辞典』(7)等によれば、文政元年(一八一八)四月三日に没した。その一周忌の法事は、右のように四月一日から命日の三日まで、三日間にわたって営まれている。景樹の名はそのどこにも出ていないが、「歌日記」文政二年の「仏御殿御裏御一周忌」は、この聞名信院の一周忌以外には考えられないのでここに掲げた。なお、『御日記』によれば、次のように三月三日にも聞名信院の法事があつたが、これは「奥向」のことであり、景樹はかわり得なかつたであろう。

一、聞名信院様御一周忌御引上。奥向ニ而昨日御待夜より今御  
日中迄御引上御執行被為在口。 御家司奥向ニ而御齋被  
下候事。

「歌日記」の「御園生の」の歌の直前は、詞書に「かへるさ野  
べにて」とある。「山の端のうす紫もさめにけりすみれつむ野の春  
の夕ぐれ」「山河の花の白波ながれきてはやくも夏にかゝりけるか  
な」の二首で、それぞれの歌に小字で「夕野遊」「首夏水」という  
題が書き加えられている。詞書の「かへるさ」は、すぐ前の「又  
の日禅林寺にて」を受けて禅林寺からの帰途の意である。それが  
何日のことだったのか不明であるが、第一首の「春の夕ぐれ」、第  
二首の「はやくも夏にかゝりけるかな」から、まだ春のうちだが  
夏の直前、と推測される。したがって、その次に四月一日から三  
日までの法事の際の歌を置くというのは、月日の順という点では  
妥当な処置である。

ただし、すぐ次には、「七夕別」「夜虫」「枯葦」「忍恋」「後朝

恋」と続く、秋に詠まれた題詠らしい五首が置かれ、さらに「深夜春雨 二月々次兼題」「野遊糸 同」「花時遠行 三月々次兼題」「折款冬 同」とある二月、三月の月次会の兼題の歌、またさらに「桜を画きたる小ぶすまに」と詞書のある画賛が置かれている。これはどのような事情によるところなのか不明である。仏光寺となんらかのかかわりのある歌なのかもしれないが、それも分からない。

【一九】

『御日記』文政二年四月九日

一、山内半右衛門 市田屋源治郎 米屋吉右衛門等催ニ而峨山江  
兩御所様御成。御出門正卯半刻。還御子刻頃。

御供

嘉繼

御徒士 貳人 御輿 八人 御近習 六人 左内

司馬

御草り取貳人 御茶弁当老人 御箱老人

左内

貢

押貳人 合羽籠三荷

三郎

將曹

御先番

此面 草り取老人

御供

兵部 若党 老人

御長持老荷 其外兩三人も参ル

一、峨山にて三軒亭之内一軒かり候而、縮緬覆幕

相掛。甚御質素之御扱也。歌宗匠香川長門介参ル。

「歌日記」文政二年四月。日未詳

卯月の頃、仏光寺御門主嵐山へならせ給ふにまかり出給ふ、

其みちにて

今日さらに昔のあすを思ひ出て昨日の夢の心地こそすれ

太秦にて

呉竹のかげにかくれて咲にけり春にしられぬ花の一もと

野辺にて

ゆくも心にのみぞかゝりける山時鳥ふちなみの花

三軒屋にて

ひるがへる若葉の隙にみゆるかなおろす嵐の山かげの舟

河辺にて

あひに逢て声と影とをかはず哉友なし千鳥かたはれの月

\*『御日記』に列記されている「嘉繼」以下「將曹」までは御供の「御近習六人」の名である。左内が二度出ているのは『御日記』筆者の誤りであろう。これら六人のうち、司馬・將曹以外の四人は、仏光寺近習である。この年文政二年、そして翌三年の「御家中」年頭礼の記事にも「御近習」として氏名が列記されており、その前後の順もこの記事と一致している。將曹は文政二年の年頭礼には見えないが、三年には近習の次の「中奥」「中居」のさらに次に、「無格」として名があがっている。ところが司馬は、どちらにも見えない。そのため、当時どのような立場にあったのか未詳である。『御日記』にはしばしば登場し、たとえば【一七】【一八】にも見えて、近習と同格の扱いであるが、おそらく左内との上下関係に曖昧なところがあって、そのために左内が二度出るといこうした誤りが生じたのではないかと推測される。なお、「此面」の下の「草り取老人」は原本もこの位置に記されているが、その左の「兵部」すなわち家司の小幡兵部につけられた草履取りであろう。「此面」は近習の北村此面であって、近習に草履取りはつかない。

「歌日記」では「卯月の頃」とあるのみで日にちのわからない

嵐山行が、『御日記』によって九日であったことが判明する。九日とすると、『歌日記』における位置とも矛盾しない。「歌日記」第一首の歌意もこれで明らかになる。『花の跡』の嵐山遊覧は四月十日（文化六年か）であるから、第二句の「昔のあす」はこの時を指していると考えられる。

山内半右衛門、市田屋源治郎、米屋吉右衛門は未詳。「峨山」は前稿〔2〕の【二三】で嵯峨山かと推測したが、これによると嵐山である。「嵯峨山」という歌枕自体、広く嵯峨あたりの山ではなく嵐山を指している場合がある可能性もある。

「三軒亭」「三軒家」は、嵐山の茶屋である。『京城勝覧』の「臨川寺」の項に次のように見える「三軒茶屋」であろう<sup>(8)</sup>。

川ばたの景よし。此河上に茶屋三軒あり三軒茶屋といふ。景よし。前に大井河。むかひに嵐山戸難瀬の滝見ゆ。茶屋の東藪の中に。小督が住たりし庵のあとあり。此河舟をうかべて両山の間舟上景よし。花ざかり又月の頃遊人おほし。

「歌日記」の享和元年（一八〇一）三月二十八日に、

麓の三軒屋といふにて宿かさざりしことをおもひて  
今ぞしる宿をしみしは山にねて初郭公きけとなりけり

とあるのによれば宿泊も可能だったようである。

この茶屋は、前記の『花の跡』の遊山でも利用され、文中に次のように登場する<sup>(9)</sup>。「御詠」は随心上人の詠の意である。

かくて大井川のむかひなる雪月花の三軒家といふ内なる花の  
宿に入らせ給ひて  
御詠

花ちりて人はとひこず成ぬれど山と水とはかはらさりけ

り

又かの三軒家に入らせ給ひて改めよそひて帰りまさんとす。

惠岳

大る川月の照せる此ゆふべ千鳥さへこそ鳴わたりけれ

【一八】の後の方に記した「七夕別」以下の題詠・画賛の次には、詞書に「ある日残の花見に出給ひて」「かへるさ」とあるように実地を踏んだ属目の歌がつづき、さらにその次に「暮夏」「余花」「新樹」「卯花」「残鶯」の題がならんでいる。題の「余花」以下の四つは晩春から初夏にかけての景物であり、かつ歌に「すぐなる畑の青麦けふみればほに出初て夏はきにけり」とあるところから、「暮夏」は「首夏」の誤りと推測される。そしてその次に、この【一九】の嵐山行がおかれている。時間の順に配列されているとみても不自然ではない。この後も、「雲林院にて 散りのこる一もと桜かげもなき雲の林のなごりなるかな」まで三首、初夏の歌が続く。次の「若林周子の髪おろされたりときゝ給ひて」は、歌に季節を表す言葉がなく、若林周子が落飾した年月日も不明であるが、その次は「杜鵑声似哭 宗明尼七回忌」、「湖月 四月十五日当座」となっており、時間順と見て不自然ではない配列になっている。

【二〇】

『御日記』文政二年六月七日

一、瓜一籠 小堀中務より進献ニ付香川長門介江暑中為

御尋被下候。

「歌日記」

なし

\*「小堀中務」は、『御日記』文政二年四月朔日に、

一、小堀中務使三而、

倅主税、御代官旁中務同様 御所方勤見習被  
仰付候吹聴。

とある。仏光寺との関係は未詳である。

【二一】

『御日記』文政二年七月二十六日

一、今日東山御廟所へ御参詣。夫より岡崎村

香川長門介江御成。還御夜八ッ時。

「歌日記」

なし

【二二】

『御日記』文政三年（一八二〇）三月七日

一、千重君様御得度無御滞被為濟事。右ニ付別記ニ

委細有之候也。

「歌日記」文政三年。月日未詳

春松千年 同御殿新御門主御得度

おしなべてたのむ陰なる松なればことなる千代の色やそはまし

\*「歌日記」の「同御殿」はこの前に、次の【二三】に掲げる聞名信院三回忌の歌の詞書に「仏御殿御年回」とあるのを受けている。したがって「同御殿」は「仏御殿」すなわち仏光寺である。

『御日記』に景樹の名は出ていないが、「千重君様」は第二十四世門主随念上人であるから、「歌日記」の「同御殿新御門主御得度」が、『御日記』の「千重君様御得度」であることは確実であろう。仏光寺にかかわる重大な出来事の年次を知るには、『佛光寺年表』によるのが最も便利で、この随念上人の得度も、文政三年三月七日であることが『渋谷歴世略伝』に依拠して示されている。その事実が『御日記』によっても確認できるわけである。

景樹の歌が詠まれたのが実際に三月七日当日であったかどうか不明であるが、前後いずれにしてもそれほど遠く離れてはいなかったであろう。「歌日記」は、これを時間順に前後正しく配置しているであろうか。

この記事の前にあつて月日を明示されているのは「十五日」（二月）の「誠子」との贈答で、その後、「故郷花」以下、題が二十一、ただしそのうち一つは題のみなので歌は二十首が続き、次いで「長樂寺の開帳に参りて」と詞書にある「東山花の錦のとぼりさへかゝげ上げてみする春かな」という春の歌、さらに続いて画賛三首がある。編者の注記によるとここまでは筆者不詳である。そして、この次に、同じく編者の注記によると木下幸文の筆で、次の【二三】に掲げる「寄郭公懐旧 仏御殿御年回 ほとゝぎす古き軒ばを過ぎがてに昔忍ぶのねをのみぞ鳴く」「往事如夢 同 さらばとて今をうつゝとなけれども過し其世ぞ夢にはありけん」の二首、そしてその次にこの「春松千年」の一首が置かれている。

その後、月日を明示するのは九首を隔てた、「盧橘遠薫 月次兼

題 五月十五日」である。その間の九首の題・詞書を列記すると次のようになる。

ある所へかたみの物をつかはすとて

さみだれの比思ふことありて

夕帰雁

首夏

沢蚩

樹陰納涼

行路菼

「さみだれ（五月雨）」の次の五首は、最初が春、次の三首が夏、五首目が秋の歌であるが、これは、「御殿御法楽 以下五首」とあるように、「御殿」すなわち徳大寺家で催された法楽のための歌がまとめられた結果である。つまり「歌日記」のこのあたりは、基本的には時間順に配置されていると見てよく、その中で「春松千年」の歌が三月七日頃の詠作であることは、配列の位置と矛盾しない。ただし、次の【二三】に引く「仏御殿御年回」すなわち四月一日から三日まで催された知足院宮の三回忌の記事との前後が、事実とは逆になっているが、理由はわからない。

なお、「歌日記」に「新御門主」とあることについては多少の問題がある。随念上人はいつから「門主」と呼ばれはじめたのか。その年次の如何によつては、「歌日記」の「新御門主」は後の書き入れということになる。

『佛光寺年表』の文政六年には十月十八日の第二十三世門主随念上人の遷化に続き、同じ十月（10）に、

随念、第二十四代の法灯を継承（19）〔歴世略伝〕

とあり（11）、「門主」の項も、ここを境にして「随念」から「随念」に変わっている。また、『佛光寺辞典』の「随念上人」の項には、

〔前略〕文政三年三月七日得度、法眼に叙せられ、同十一月二十六日大僧都に任ぜられ、同六年十月佛光寺の法燈を継いだ。弘化二年正月二十三日、四十一才で遷化するまで二十三年の在職。」とある。

しかし、『御日記』文政三年三月十一日に書き留められている勸修寺家への手紙は、すでに随念上人を「新御門主」としている。「門主」という呼称は得度の後、「法灯を継ぐ」より前から用いられているわけで、「歌日記」の「新御門主」はこうした用法にならつたものと考えられるのであつて、必ずしも後年の書き入れではない。

【二三】

『御日記』文政三年（一八二〇）四月一日

一、聞名信院様三回忌御法事。今御待夜□御執行被為在事。

同二日

一、聞名信院様御祠堂経。□年者開闢之事故御齋等

有之候へ共、当年者御齋料ニ相成候。乍去、留守居奥老女

三河・若狭・亀田三人へ御齋被下事。

同四月三日

一、聞名信院様三回忌御法事御満座ニ付

惣法中御齋。

院家衆 杉之間

御堂衆 耕作之間

「歌日記」文政三年。月日未詳



寄郭公懐旧 仏御殿御年回

ほととぎす古き軒ばを過ぎがてに昔忍ぶのねをのみぞ鳴く

往事如夢 同

さらばとて今をうつとなけれども過し其世ぞ夢にはありけん

\*『御日記』の「聞名信院様」は【一八】に出ている随応上人室禱子である。同じく『御日記』四月二日の「□年」の□は、内容から推測するなら「昨」であろう。【一八】の文政二年四月一日に、「右開闢御齋、法中一統・御次中惣一統惣菜。但し惣菜者当年計二相限候事」とあつたのと対応していると考えられるのであるが、重ね書きされており判読できない。

前項と同じく『御日記』に景樹の名は出ていない。しかし「歌日記」の「ほととぎす」の歌は、『桂園一枝』に「事につき時にふれたる」の一首としておさめられており（新編国歌大観番号四九一）、『桂園一枝講義』に、「寄子規懐旧の題なり。仏光寺の御台の三回忌によみたり。またぬ青葉に詞書を書きたり」とある。そしてその『またぬ青葉』には、四月七日のところに、

仏光寺のみうらの君、をとつ年の四月にかくれさせ給ひし、

其みとぶらひの御題奉るべう仰下されければ、時鳥によする

懐旧といふを出しまゐらせつ。さておのれもよみける、

ほととぎす古き軒端を過ぎがてに昔しのぶのねをのみ

ぞ鳴く

こはうらのみとのゝあれ渡るを、もうのぼるゆきかひに見入  
れ奉りて、いためるこゝろ也。

とある<sup>12</sup>。「其みとぶらひの御題奉るべう仰下されければ、時鳥によする懐旧といふを出しまゐらせつ」とは、関係者によって追

悼の歌会が催されたか、歌が詠まれたかして、その題を景樹が出したのである。それが何日のことであつたのかは分からない。この記事自体は前記のように『またぬ青葉』四月七日に出ているが、その日の出来事ではなく、やや前のことをさかのぼって記した体である。いずれにせよ、「仏御殿御年回」が、『御日記』の「聞名信院様三回忌御法事」であることは確実である。『御日記』によれば、この三回忌の法事は四月一日から始まり三日に満座になっている。

「歌日記」におけるこの前後の配列については前項【二二】に記した。そこでふれたように、【二二】【二三】は、「歌日記」においては実際の日にちの前後と逆の順になっている。

【二四】

『御日記』文政三年四月十四日

一、御忍<sup>ニ</sup>而香川長門介宅江御成。午後早々御出門。還御

両御所様 御供

嘉継

大蔵卿

帯刀  
左京

「歌日記」

なし

※「両御所様」は随応上人と千重君である。千重君は【二二】のようにこの年の三月七日に得度し「新門主」と称されていた。御供の「嘉継」は近習の辻嘉継、「貢」は同山田貢、「帯刀」は未詳。「左京」は中奥の河合左京、「大蔵卿」は坊官の稲田政観である。この日のことは「歌日記」に見えないが、『またぬ青葉』に次の

ように詳しく記されている。「法橋せいくわん」(二行目)は『御日記』の「大藏卿」すなわち稲田政観、「新門主の君」(一五行目)は随念上人、「御はらから正行院の君」(二六行)は応専連枝、「みこ鶴丸君」(同)は応専連枝の長男鶴丸である。これによれば、随応上人は千重君のほかに応専連枝・鶴丸をもなつて訪問し、千重君・鶴丸の桂園入門の礼式を執りおこなうとともに、三月十二日に妻包子を失つた景樹を慰撫した。

十四日、今日俄に仏光寺の君、いらせ給ふべしとて、法橋せいくわんなど、かれこれ来つどひて、のゝしるめり。御まうけいかゞすべき。まづ川つきなる高殿、見はらしよし。其北おもてを、おましにしつらひ、新らしきむしろの長むしろ、なげしのかぎり、かうらんの下までしきつめたるべし。いとはせて涼しきまにとて、青すだれかけ渡して、半高くかゝげたる、ひんがし山の若葉打匂ひたるも、いとなつかしきに、日々まぬらぶあたりも、かしこの限なるいらかなりや。例のさしぐみて打まもらるゝに、かの他の国の帝、きさいの宮のつかを望みて、はるぐ心をやられけんを、ふとぞ思ひ出づ。何がしのさかし人、みぬかほつくりけんさへ、いとにくゝ思ひなりて、

たかどのをこぼつにつけてこぼれけむ涙をさへに慕ふけふ哉

ひつじの時ばかり、新門主の君ともなはせて、いらせ給ふ。げにや此春世にゆすり聞えし御得度のこと、あざやかに童形の花のかをりは、いづちやり給ひけん、名残のみどりいと青く、あるより出てと見奉るに、はたばりひろきおんけさなど、所せきを、をさくしくかき合せ給へるも、色すなはちと見給へおどろきて、涙さへそゞろくめり。よきかたにもあしきにも、いづれ変りゆくらんは、いみじき世なりや。君には此

頃の歎のうへを打いで給ふまにく、うちうるませ給へるも、いと忝なし。なきかげも、御かげにふしていかに聞くらん。うへもなき君が涙のしら玉はよみちをてらすひかりなりけり

御はらから正行院の君も、みこ鶴丸君つれて、したがはせ給へり。新門主も鶴丸君も、おひすがひたる御齡に、今はおとなだち給うれば、あらためて我道に入らせ給ふべき名簿うちく今日ついでに、とりおこなはせんとや。御坐の間いとせばきに、ひろぶたやうのもの、人々はこびまかなひわづらふめり。やをらかづけ給ふ御袖に、いたゞくかしら打もまろぶべし。今より世中の曲みたる道をふみかへて、その岡べによせおき侍らば、むげにおのれらごとき愚昧の入道には、よもなし給はじなど、打急まひ宣はず。すべてかしこしともかしこう、おほけなきわざなりや。さて正行院の君とうで給へるを、さる御祝のみ心にやとひらきみれば、観水院と名づけたる事の由承はり及びぬ、などはしがきあらせて、

すみまざるよるの川瀬の音づれを音づれなりときゝ明すらむ

夕かけては、たかどのにうつり給ひ、み盃あまたたびすゝみて、何くれの御物語、かきくづし給ふほど、見えわたる川原のけしきいはんかたなし。かの河音すみわたりて、風いとひやゝか也。

すむ月の更け行くまゝに高どののうへまでのぼる水の音かな

とうたひ出せり。猶いはまほしき心もあるを、くみたまひてや、語りいでたまはく、まるもおとつ年の此頃、妻にはなれて、其悲しみ思ひしりぬ。親におくれ子をさきだつる苦しみのいみじきは、もとよりながら、こは一すぢのせん方なきに、中々思ひあきらむる方もあなめり。めのわかれば只今更に其

かはりえらるべう、しのぶ草をわすれ草ともつみかふべく、  
さるかたに人もすゝめ物すれば、手もふれつべきものに、世  
にももてさわぐなん、殊更にかなしき。又たゞ人の、ひとり  
のやつこつれたらんが、其ひとり道を道なかに失ひたる心地し  
て、かたはらさしあたる、何くれのあなゝひに、おろく  
まどふべきなん、其やつこは何ならぬに似たるものゝ、打つ  
けのくるしみ、物に似がたき心地すめりや。さるたゞ人のう  
へは、身にしらねど、思ひよそふるなんわりなき。などのた  
まふを承るに、隔てざりけりと思ひしりぬ。このほどある人  
来たりて、まことや妻におくれし心まどひは、まよひ子にな  
りし童べの心地なんすると申しゝを、げにさもこそときゝ侍  
りし。かれも、われも、その子ならねば、まよひたる心は、  
打つけにしり侍らぬ物から、引よせて思ひくらぶるなん、君  
がおぼしあて給ひけん御心ばへに、かしこくもかはり侍らぬ  
など、何くれ此世のせんすべなきをかたぶきかはし、語らひ  
奉るほど、川づらは皆くらくなりて、見え残りたる山もとに、  
鳥の声しばくきこゆ。

【二五】

『御日記』文政四年（一八二二）正月十日

一、御会初二付香川長門介參上。御目錄金百疋被下事。

「歌日記」文政四年正月。日未詳。

春水澄 仏御殿御会始御兼題

霽にも濁らぬはるにけり結ぶにあまる山の井の水

暮春雲 御当座

おほぞらの春のゆくへにたつ雲のしろきも花と見えずなりにき

寄都祝

万世も平安とさだめ置きつらんこの都こそ大みやどころ

ゆやのかた

ちりぬらん心の内の花桜匂は世にもかくれざりけり

春草のなかにつくぐかきたるかた

みやこ人春の日数のたけぬ間にきても摘なんのべの百草

雨中嵐山のかた

花もその心あらし山雨にだに散らでみやこの人を社まで

遠山に雪のこり、すそのに若草あるかた

さえかへることしの雪の七くさは雪のつむにぞまかせたりける

梅のほつえに朝日さしたるかた

みづ枝さすさしたるうめの紅にをくれしあさつく日かな

よしのゝはな かがに桜の花つみいれたるかた

つみいれし色もよしのゝ花がたみならぶものなき山づとやこれ

柳に鶯のかた

青柳もまづ靡きけりうぐひすのおのがはぶきや春の初風

すみしよのかた

住の江のはしも千年やかけつらんまつの木のまにみえわたる哉

杉おほくたてる。山さくらもさけり。其このまよりつきみえ

たるかた

貴舟河ながるゝ水のうづ桜ものすごきよの月にみえつゝ

よしのゝ山にのこれる雪のかた

みよしのゝ木末の桜さかぬまにはなともみゆるはるのゆきかな

かつらの紅葉したるかた

紅に匂ふをみれば久かたの月のかつらはいろなかりけり

若菜生る野べに朝日さすかた

山はまだ雪寒けれどもえ出て春を若なのあさ緑なり

つくま祭のかた

人しれずかさねし袖のかすぐはあらぬかづきにあらはれにけり  
鶏あはせのかた

おさまりし御代のつゞみのためしにもあはするとの声聞ゆなり

ふかみぐさ

さばかりもとめる花の色いかなれば匂ふ日かずのはつかなるらん

水辺 賤がやのもとに桃やなぎ有かた

心なきやどにはなにをながすらんやよひの桃の花の下水

紅葉に小鳥のかた

さへづりし春のもゝ鳥ひとりきて鳴ねかなしき秋の夕暮

\*『御日記』の「御目録金百疋被下」は、ここまでの仏光寺歌会始の記事にはなかった記述であるが、実際になかったのか、あったけれど書かれなかったのか、不明である。「歌日記」の「寄都祝」以下は、仏光寺の歌会始に参殿した折の画賛と推測して掲げた。五首目、十一首目の詞書の「つくぐく」、「すみしよ」はもとのままである。「つくぐくし」、「すみよし」の誤りであろう。仏光寺にかかわる景樹の画賛については、前稿〔2〕の【二五】に記した。

【二六】

『御日記』文政四年三月六日

一、正行院殿・正受院殿、五時御発駕之事。

尤、草津駅迄御見立使、山田勘解由相勸。

「歌日記」文政四年三月五日

三月五日

正行院の君東へおもむき給ふをおくり奉りて

東路のみちのそらより降花のひるがへるべき法の上かな

隅田河住なれぬべき君なれば又と契るもかひやなからん  
ゆく君をしたふにつけて慕ふ哉なれしむかしの東路の花

\*『御日記』に景樹の名は出ていない。また、『御日記』の六日に対して「歌日記」は五日と、日付も異なるが、「歌日記」の「正行院の君東へおもむき給ふ」が「正行院殿・正受院殿、五時御発駕」に対応することは確実であろう。『御日記』の「正行院殿」、「歌日記」の「正行院の君」は随応上人の弟の応専連枝であり、『御日記』の「正受院殿」は応専連枝の嫡子、鶴丸である。【二四】に引いた『またぬ青葉』に、「御はらから正行院の君も、みこ鶴丸君つれて、したがはせ給へり」とあった。「正受院」という法名は、『御日記』文政四年二月一日に、

一、御連枝正行院殿御嫡男鶴丸殿、今日辰刻御得度。

とあり、続いて記されているその式次第の中の、鶴丸が新たに得た法名についての記述に、「御法名応現、御院号正受院」という注記がある。三日後の九日には応専室の近子も江戸へ向け京都を発っている。一家あげての出府だったのである。

この応専連枝一家の江戸下向は、『佛光寺辞典』に、「文政四年三月十九日、下谷別院西徳寺々務をとる」とあり、また『佛光寺年表』に、「順如第二子・応専、江戸北豊島竜泉寺・西徳寺（後の東京別院）、第八代を継承（44）（初代連枝）、この頃より「田圃の門跡様」と呼ばれる」とある出来事であるが、これは、実は長い歴史をもつ重大事件の一つまでであった。

その発端は、文明十四年（一四八二）までさかのぼる。十三代光教上人の跡をうけて法務を執っていた経豪が、この年、仏光寺を去って本願寺の蓮如上人に帰参し、仏光寺山内四十八坊のうち四十二坊が経豪と行動を共にした。以下、首藤善樹「佛光寺の歴

史―戦国―近代―」(13)の一節を引く。

その非常時にあたり、荒廃した教団の存続と再建に身を投じたのがいわゆる寺僧六坊であった。六坊とは、つまり四十八坊中経豪に従わず踏み留まった分であり、新坊(光蘭院)・西坊(長性院)・南坊(大善院)・奥坊(教音院)・角坊(昌藏院)・中坊(久遠院)をさす。佛光寺のちに門跡に列せられたが、六坊は再興に尽くした功により門跡の院家に補せられた。六坊はこれを後世まで誉れとし、本願寺の院家は官金の上納によって昇進が可能であるのにたいし、佛光寺の院家は六坊に限られることを自他に誇った。事実、近世に至っても六坊は本山の経営について、門主と互角に近い役割を分担していた。本山直属の末寺・門下とは別に、六院はそれぞれ独自の末寺・門下を多くもっている。したがって六坊は独自の経済力を有し、その経済力を提供することによって末寺を支えたのである。

応専連枝の「連枝」とは門主の兄弟である。門主の兄弟が「連枝」と認定されると、その血筋の上から、六院より格上になるのは避けられない。したがって仏光寺には長く連枝が存在しなかった。ところが、随応上人の代にいたって、その弟の正行院が連枝として江戸下谷別院西徳寺を継ぐことになった。この間の事情を、湯川信敬口述「仏光寺の由緒沿革に就て」は次のように説明している(14)。四行目の「両願家」は東西の本願寺、六行目の「佛派」は仏光寺派である。

しかるに第二十三世随応上人の時、天明時代(大火あり)随応上人の御弟、応専師を連枝として江戸下谷別院に置くと云う義の起こった時、六坊はこれに反対して御堂に出勤せず

種々争いがありました。が、両願家はそれぞれ別院には連枝を住持させられこれに対して將軍、大名等の扱いは丁寧であります。が、独り佛派のみは無い故對抗上派勢拡張の政策上、是非その要ありとして、遂に連枝を置く事となりました。

しかし、六坊はなおおきかない為、これに代わる榮職を与えると云う事で、六坊の住職には僧正までの僧官を勅任せられる様取り扱おうと云う事になりました。最も權僧正となれば緋衣が着用出来ますがしかしこの法衣は本山内においては着用を遠慮せよと云う条件で、この連枝問題は解決しました。以来下谷別院には代々連枝を置くこと云う事になりました。

景樹がこうした事情をどこまで知っていたのか分からない。しかし、第二首の「隅田河住なれぬべき君」「又と契るもかひやならん」は、応専連枝はもう京には帰らないことを景樹が知っており、かつ景樹がそれを知っていることを連枝も知っていることを前提としなければ成り立たない表現である。さかのぼって考えると、「歌日記」文化八年(実は文化六年)(15)の歌道放棄も、前稿「2」に記したように、直接には大僧都に任じられたことがきっかけであろうが、根本には本山において連枝が置かれていた立場があったのではないかと思う。そして、「言のはゝ人の誠の道なるをいかによきてか君は行くらん」というその折の景樹の歌も、なぜ避けようとするのか、応専連枝の心が分からない、といった、その真意を疑ったり糺したりするような歌ではなく、避けられるはずのない道も避けなければならぬ、難しい立場に置かれている連枝の行く手に思いをやり、同情しての歌と解すべきではないかと思う。

「歌日記」によると、応専連枝が京都を出立したのは三月五日としか思えない。しかし、『御日記』によればそれは三月六日のことであった。『御日記』がこのような重大事の日付を誤ることはな

いはずである。「歌日記」の誤りか、または実際は五日に詠んでおいたのであろう。

ちなみに、「歌日記」文政四年（月日未詳）に、

仏光寺の君のみはらはらの正行院の君、東におもむき給ふ、みはなむけの御詠草の奥に

何故にかくは涙のこぼるらん悲しかるべき別れならぬを

とあるのは、この時のことであろう。「正行院の君」は応専連枝である。「御詠草」は随応上人の詠草であろう。このあたり、『桂園遺稿』編者の注記によると筆者は不明であるが、それが誰であるにせよ景樹に対して敬語は用いていない。したがって、「御詠草」は景樹の詠草ではない。考えられるのは「仏光寺の君」すなわち随応上人の詠草である。随応上人は応専連枝へ送る餞別の歌を景樹に見せ添削させたのではないかと思われる。

### 【二七】

『御日記』文政四年四月朔日

一、御内用ニ付香川長門介宅江環参、及示談。

「歌日記」

なし。

\*「香川長門介」の「香川」は、次のような理由で「喜頭」の誤りと推測される。喜頭長門介は二条家侍の喜頭長門介時富（16）である。

まず、「環参」とある「環」は、仏光寺の用人木村環である。文

政四年元旦に、「御家中御礼於御座之間二」云々とあり、その「家中」の姓名が列記されている中に、二人の「御用人」の一人として「木村環」が出ている。用人の格は坊官、家司に次ぎ、近習の上である。他家への使者や他家からの使者の応対などを務める点では近習と同じであるが、その用件が定期的な時候の挨拶や形の決まった慶弔の挨拶ではなく、やや重要な事柄である場合が多い。

その用人が、景樹宅に向くのはあり得ないことではない。喜頭長門介宅に環が出向いたという記事はこの前後に見えるが、喜頭時富も景樹も同じ従六位の長門介である。また、前稿（2）の【一三】では、法蔵寺への随応上人御成の前日、家司の小幡兵部と近習の宇野雅楽が景樹宅を訪問し、「乍遠方彼寺江致推参様」依頼している。家司と近習とが訪問しているということは、その中間の格である用人の訪問もあり得るということを示している。

しかし、今回は「内用」である。「内用」には「内証の用件」「内証の借金」という二つの意味があるが、借金の話であるとしたら景樹に相談に行くなど到底ありそうもない。内証の用件であったとしたらありえないわけではないが、ここまでの『御日記』における景樹の待遇から見ても、わざわざそれを書きとめるとは思えない。加えてこの前後に景樹と関係すると思われる記事もない。

一方、ちょうどこの頃、二条家との間に金銭にかかわる出来事が生じており、それに環と喜頭長門介がかかわっていた。まず、『御日記』文政四年三月二十二日に次のようにある。

一、二條様より三百金御返進 并御利足添

猶亦来四月廿日迄二金五拾両

御内使 河岸主税

御借進御頼被為在候事。

御答

環

次に、三月二十七日には、

一、金五拾兩、環持參。喜頭長門介江渡シ、即仮受取書有之。跡より証札可差出旨。

とあり、そして四月一日に【二六】としてはじめに掲げた記事があり、つづいて二日には次のようにある。

一、河原御殿江御内用使 此面。長門介面会。

一、御同所より御内使沢登一学。面会 環。

時候御口上、且亦五拾金御預ケ之処、当時御都合無之

ニ付、銀老貫目与金貳拾五兩御預ケニ相成候。尤

御預ケ帳面等預り置、追而御都合之上、例之通調印

可致相對。但環より一学宛仮請取差出置。

以上の記事から次のような事態が想像される。三月二十二日、二条家から仏光寺へ、三百兩とその利息とが返却された。使者は河岸主税、応対したのが木村環である。その際、今度は五十兩の借金の依頼があった。四月二十日までに、ということであったが、さつそく三月二十七日に、環が二条家に持参し、仮受取書を受け取った。続いて四月二日、「此面」すなわち仏光寺近習の北村此面が河原御殿に向き、「長門介」すなわち喜頭長門介が応対している。河原御殿は二条家の別邸である。そしてその日のうちに沢登一学が仏光寺を来訪し、五十兩の貸し借りを、銀老貫目と二十五兩に減らしている。一学はその際、差額を持参し返却したらしく、環から仮請取が差し出された。

四月二日の「当時御都合無之」は、仏光寺と二条家のどちらの都合をいうのか今ひとつ分らないが、しかし、いずれにせよこのような一連の動きから、四月一日、環が内々に喜頭長門介宅に出向き、五十兩を仏光寺側の都合により銀一貫目と二十五兩に変更するよう交渉したことは十分に考えられる。二日にも此面が河

原御殿に向き長門介と面会しているが、近習の此面にはそうした交渉は荷が重かるう。此面が表向きの使いとして、二条家側から額の変更を申し出た形にするため、二条家から人を差し向けるよう依頼したと推測される。

もちろん、二条家との間のこうした問題とはまったく別に、景樹宅への環の訪問はあったのかもしれないが、「香川」が「喜頭」の誤りである可能性のほうが大きいと思う。

【二八】

『御日記』文政四年十一月二日

一、香川長門介方□朦中為御見付。

野菜 一折

「歌日記」

なし

\*□は虫損のため不明瞭であるが「江」であろう。「見付」は「見舞」の誤りであろうか。ここではそう解しておく。

「朦中」は喪中の意であるが、誰の喪なのか、次のように三通り考えられるが、どれも推測、想像にとどまる。

一つは木下幸文の喪で、ちょうどこの日に没している。幸文も仏光寺との関係を有しており(17)、随応上人から見舞いがあった不自然ではないが、幸文の逝去によって景樹が喪中、ということにはならないのではないか。また、死没当日の見舞いは喪中見舞いとは言わないのではないかと思う。

二つめは、一ヶ月前の文政四年十月三日に没した養父景柄の喪である。すでに離縁になっているが、景樹は引き続き「香川」を

称し、景柄を「父」と呼び続けている。そうした景樹の論理(18)に従うなら、景柄の喪中見舞いが景樹に届けられるのは当然である。しかし、なぜそれが一ヶ月後なのか。養父の喪中見舞いは没後一ヶ月という原則があったのかもしれないが、確認できない。もう一つは、景樹の娘の孝子の子、つまり景樹にとっては孫の喪である。孝子は文政二年に九条家諸大夫の芝寛寧に嫁したが、かつて聞名信院に鍾愛されていた(19)。その孝子の子がこの頃没する、といったことがあったのかもしれない。しかし、はたして孝子にそのような子があつたのかどうかからして不明である。

〔付記〕

『御日記』をはじめとする本山仏光寺所蔵資料の閲覧につき、澁谷曉眞門主と御家族に格別の御配慮を頂戴した。ここに記して深謝申し上げる。なお、本稿は平成十七年度科学研究費補助金基盤研究C(2)による研究成果の一部である。

注(1) 彌富濱雄編『桂園遺稿』上・下巻(五車楼 明治四〇年三月・同八月)

(2) 以下、それぞれ前稿(1)、前稿(2)と略記する。

(3) 各年の『御日記』の伝存状況は次のごとくである。

文政元年 元日〜十二月晦日 一冊

文政二年 元日〜十二月二十九日 一冊

文政三年 元日〜十二月晦日 一冊

文政四年 元日〜十二月晦日 一冊

文政五年 元日〜十二月晦日 二冊

(4) 文政二年正月執筆と推定される、柏原正寿尼宛の景樹の手紙(洛東遺芳館所蔵)に、「私事しはす十五日帰京」とある。

(5) 内田正男編著『日本暦日原典』(雄山閣出版 昭和五〇年七月)、湯浅吉美編『増補 日本暦日便覧』(汲古書院 平成二年二月)

(6) 『増補 日本暦日便覧』(注5)による。

(7) 澁谷有教編『佛光寺辞典』(本山佛光寺 昭和五九年三月)、佛光寺教学資料編纂委員会編『佛光寺年表』(真宗佛光寺派宗務所 平成九年四月)

(8) 享保三年(一七一八)春元版、天明四年(一七八四)夏再刻。『新修京都叢書』第十二巻による。文は六三八頁、絵は六八八頁にある。

(9) 東山聖徳寺所蔵円雅書写本(外題『嵐山御詠歌』)による。

(10) 日は記されていない。

(11) (19)は随念上人の年齢、「歴世略伝」は『渋谷歴世略伝』に依拠したことを示す。

(12) 『またぬ青葉』の引用は、佐佐木信綱編、続日本歌学全書第四編『香川景樹翁全集 上巻』(博文館 明治三一年六月)による。

(13) 千葉乗隆・梨本哲雄監修、平松令三責任編集『佛光寺の歴史と信仰』(思文閣出版 一九八九年三月) 本文篇。

(14) 澁谷曉眞編、再々版・現代仮名づかい版(本山佛光寺 平成一三年一〇月)による。

(15) 正宗敦夫「桂園史料」(『萬年艸』巻第六 明治三六年六月)、兼清正徳『木下幸文傳の研究』(風間書房 昭和四九年三月) 一七―一七三頁ほか。拙稿「香川景樹「歌日記」の「年づけ」――『桂園聚葉』を手がかりとして――」(『鳥取大学教育学部研究報告(人文・社会科学)』第四七巻第二号 一九九六年一二月)

(16) 前稿(1)の【五】参照。

(17) 兼清正徳『木下幸文傳の研究』(注15)

(18) 二つの梅月堂――まえがきにかえて(拙著『香川景樹研究 新出資料とその考察』和泉書院 一九九七年三月) 参照。

(19) この件について詳しいことは分からないが、『またぬ青葉』に次のようにある。【二三】に引いた四月七日の、「こはうらのみとのゝあれ渡るを、もうのぼるゆきかひに見入れ奉りて、いためるこ



ゝる也。」のすぐ次である。

和泉守藤堂高嶺朝臣御女

この君は、ものゝふのみ家にひとゝならせ給ひて、み心だても、むげにめゝしうなど、いふかひなくは物し給はぬ物から、いつくしみの露、はたかゝらぬ隈なく、仰ぎまゐらせぬ人なき中にも、おしなべならずおぼしくだされしはさら也、むすめ孝子をさへ、めでかなしませ給ひ、わきてみ志深う、御袖の下にかいくゝませて、かゝらん嫁がねをこそえまほしうなどさへ、のたまひくだされしみたはぶれも、身にあまりて忝けなみ奉るは例のやみなるまどひになん。

『地域学論集』第二卷第一号 平成一七年六月